處から來るのか？　勿論それは作者のすぐれた藝術が釀し出したものには違ひ無いのだが、しかし作者に此のすぐれた藝術を成さしめたモデルその者の美しさ――それを先づ想はせずには措かなかつた。美しいと云つても、それは尋常の美しさでは無かつた。深い魂の底から放射される內部的の美しさであり、又、深い魂によつてのみ發見される神秘的な美しさであつた。かういふ美しさを有つた女性は、幾千人に一人あるか無いかであらう。同時に、かういふ美しさを發見する事の出來る者は、恐らく幾萬人に一人あるか無いかであらう。それは、傑れた藝術家の眼を待つてはじめて發見されるところの美しさであるばかりでなく、本當にそれを愛する事を知つてゐる者の、魂の眼を待つて、はじめて發見されるところの美しさで無ければならなかつた。

その繪に見入つてゐる者は、しかし、その美しい人ばかりではなかつた。その「初夏」と題された繪は今度のこの展覽會での場を壓しての呼物であるだけに、見物の行列はそこで喰ひ止められて、十人近くの人々が、魅せられた視線を一つの畫面に集めてゐた。

『眼が素敵だよ、とても素敵だよ。何といふ深い表情だらう！』

色の惡い、文學青年らしいのが、抑へきれぬ感嘆を以て斯う傍の一人にさゝやいた。

『うむ。――不思議な眼だ。何かじつと見つめてゐるやうな、然うでもないやうな――。何となく神的な感じのする眼だが、それでゐて、何だかひどく悲しさうだね。』

『そのくせ、口もとのところや、顎から首筋のあたりは、かなり官能的ぢや無いか？』

『うむ。兎に角これはすばらしいね』

こんな事を、こそ〳〵と囁き合つてゐる一方では、

『都築專一。あまり聞かない名だな』

と、中年の紳士が、同伴の、若い女學生を顧みて云つた。

『ちよい〳〵評判は聞いてゐた人よ。此の繪のモデルね、此の方の奥さんなんですつて』

『ほう！』

『此の都築さんて方、今、御病氣なんですつて――。今日の××新聞に、都築さんて方のお話が出てゐましたわ。もう少しで書き上がるつて時に、病氣になつたのを、無理に押して書きあげてしまつたんですつて。それで繪が出來あがると一緒に、どつと床に就いて、まだずつといけないんですつて――』

『命賭けで書いたんだね。それだけの事はあるね。ふうむ。』

そんな周圍の囁きを聞くともなく聞きながら、その、美しい人は、まじろぎもせずに畫面をみつめてゐた。

『たしかに――たしかに、あの男は――』

いきなり、背後の方で、彼女のみすぼらしい同伴者が感嘆の叫びをあげた。

『たしかにあの男は天才ですよ。天才ですよ！』

頓狂な調子が人々を驚かした。人々は一齊に振返つた。その大きな鼻を斜めにつきあげるやうにした彼の顏は、昂奮の爲めにぽッと赤くなつてゐた。ボヘミアン・ネクタイを、疎らな髯ごと自棄に引掴むやうにした握り拳が、顎の下でわなわなとふるへてゐる、その樣子がをかしかつたので、人々はくす〳〵と笑ひ出した。が、彼は、そんな事には氣がつかないで、

『天才ですよ！　おくさん！　これは慥かに後世に殘る不朽の――不朽の傑作です。――僕は、おくさん！　あいつとさしちがへて死に度いです！』

彼は――三好明は、あへぐやうに叫び續けた。例のいくらかおどけた調子ではあつたが、併

し、本當に美を解する者の感激と、同じく藝術に携はる者の、抑へ難い嫉妬とは、欺き難い眞劍さで、その表情を緊張させてゐた。實際、彼の小さい細い眼は酣醉者のそれのやうに、異樣に燃えてゐた。

が、呼びかけられたその美しい人は――云ふ迄もなく彼女は房子であつた――房子は、三好の言葉には、唯うるささうに一寸眉をひそめたゞけで、やゝ靑ざめた顏を假面のやうに硬張らせてゐた。それは、むらがり起る樣々の表情をじつと押鎭めた顏だつた。底に怒濤の逆卷をかくした海面を思はせるやうな顏だつた。が、じつと畫面に凝らされた眼は、露はに彼女の心の動亂を語つてゐた。それは喰ひ入るやうな、燃えつくやうな激しい眼であつた。その繪に見入る多くの眼の中で、彼女の眼だけが別のものだつた。それは憎みに喘ぎ呪ひに呻くすさまじい眼であつた。

『あの男は天才です！　だが、あの男一人の力で描けた繪ぢやないですな。　半分は――半分は此のすばらしいモデルの力ですな』

三好は、譫言めいた調子で繰返した。そして、感激の溢れを以て、尙ほ何か云ひ掛けようとすると、房子はつと、畫の前から身を退いた。そして、三好をあとに殘して、ずん〳〵と次の部屋

へと歩み進んだ。

愛と藝術

房子と三好とが、會場を出た時は、もう、暮れるに間もない頃であつた。房子は、追ひすがつては、何か話しかけようとする三好には尻目をも呉れず、その青白く引締めた顏を押据ゑるやうにして、つい、ついと、直線的な歩みを運ぶのであつた。が、その亂れ勝ちな足どりの、どうかすると、裾もつれがして、ふら〳〵とよろめくやうなのを見ても、彼女が今どんな心の狀態にあるかが察しられた。

しかし、三好は、あまりに感な洞察者だつた。――彼はただ女王の不機嫌に度を失つて、どうしたらいゝかと思ひまどひながら、おど〳〵として、犬のやうにあとについて歩いてゐた。

房子がそこへ出て來ると、運轉手はあわてゝ飛び降りて、扉に手をかけた。

『いゝのよ。私、乘らないから、そのまゝ歸つてお呉れ！』

房子は、かう運轉手に命じた。

『は』

運轉手は一寸不審さうに主人の顏を見上げた。

『すこし散歩して歸ります』

『は』

運轉手はぴよこりと頭を下げて、手持無沙汰な樣子で、再び運轉手臺に飛び乘つた。

房子は、そのまゝ脇目も觸らずに歩いてゆく。――三好も、眼に見えぬ糸に引かれるやうにそのあとについて歩いて行つた。

『おくさん』

すこし歩いたところで、三好は、そつと斯う呼びかけた。が、房子は答へなかつた。無論、振向いても見無かつた。あとをついて行く三好の存在などは、まるきり、彼女の意識には無いらしく思はれた。

『おくさん』

二度目にかう呼び掛けたのは、精養軒の横手の坂を降りて、池の端の道へ出てからであつた。

――矢張返事が無かつた。

三好は、悲しげに、その小さい眼をぱちぱちとまたゝいたが、

『おくさん！』

と、三たび呼びかけて、

『おくさん、何處へ行くんです？』

と、房子は立ちどまつた。而してしづかに、うしろを振向いて、

『あなた、跟いて來たの。うるさいわねえ』

濃い眉をヒステリックにぴりゝと動かした。

『お邪魔なら、失禮しますがね。――ですが、一體何處へいらッしやるんです』

鞭の下の犬のやうな眼附で、三好は房子の顏を見上げた。

『何處へ行かうと、わたしの勝手よ』

『それは、勿論、あなたの御勝手ですがね』

『ふゝ！』

と、房子は硬ばつた顏の、口もとのあたりをひきゆがめるやうにして嘲笑つた。そして、ま

た、そのまゝずん〳〵と歩き出した。

三好は、そのうしろ姿を悲しげに眺めて、ほッと一つ溜息をついた。どうにも手がつけられな

い！　どうしてこんなに不機嫌になつたのだらう？――と、彼は、心の中でつぶやいた。而して

思ひ切つて、

『左樣なら！』

と云はうとしたが、それにしても同じ方向に向つて歸らなければならないので、のろ〳〵とま

たあとに跟いて歩き出した。

ところが、思ひ掛け無い事には、さうして二三十歩歩いて、もう少しで廣小路の雜沓の中へ出

ようとした時、房子は急に立ちどまつて、此方へ振向いた。而して、馱々ッ子染みた調子で叱る

やうに云つた。

『何を愚圖々々してゐるのよ！　早くいらッしやいな』

機嫌が直つたのか知ら？　三好は、だが、おづ〳〵とした眼を、遠くの方から投げながら、意

氣地無くしりごみをした。

『早くいらッしやいな。お馬鹿さん。ほゝゝ』

房子は聲をあげて笑つた。不自然に引歪められた美しい顏が、花瓣を裂くが如くに見えた。

それから二三十分の後であつた。二人は、銀座の裏町の、カツフエ・ドラゴンの二階の壁際の箱席に、向ひ合つて掛けてゐた。未だ宵なので、客は、彼等の外に、二組ばかりしか無かつた。それに、そばに置いてある鉢の棕梠竹が何人にも氣がつかれぬやうに蔭をつくつて呉れてゐた。

白い石の卓の上には、一皿づつの輕い食物が、手をつけられぬまゝに置かれてゐた。房子の前には、カクテルの杯が、三好の前にはウイスキイの杯が、二つ三つ、五つまでも並べられてゐた。

ウイスキイが、すつかり三好を元氣づけてゐた。細い小さい眼にも生々とした光が躍り、大きな鼻の頭は、花の蕾のやうに赤くなつてゐた。

『だけどねえ』

房子も一口二口のカクテルで、いくらかぽッとした顏附になつてゐた。

『だけどねえ』

と、もう一度繰返して、

『あの繪は本當にそんなにいゝ繪なの？』

『傑作ですな。すばらしい傑作ですな』

三好は、急き込んだ調子で、

『彼の男は矢張天才ですな。——たしかに天才ですな』

『馬鹿に感心してるのね』

『殘念ながら感心せざるを得無いですな。——ですが、あの男の力ばかりぢや無いですな。半分はモデルの力ですな。勿論、あの男が立派な藝術家である事は慥かですが、しかし、あれは、單に藝術家だけの仕事ぢや無いですよ。あの男がどんな天才であるにしろ、たゞ天才であるといふだけぢやあ——あの繪は描けないんですよ』

三好は、ポヘミアン・ネクタイを鷲掴みにして、ぐい〳〵とひつぱりながら夢中になつてしや

べり出した。

『といふと、どういふ事になるの？』

『天才だけぢやない、藝術家だけぢやない。云つて見れば、藝術以上のものが、天才以上のものが、あの繪に働らいてゐるのですよ。たとへばですね。レヂナルド・ダ・ギンチは天才です。だが、彼がただ天才であつたといふだけぢや、あのモナ・リザは描けなかつたでせう。モナ・リザは、ダ・ギンチの天才が生んだ作品にはちがひ無いんです。しかし、ダ・ギンチの天才だけが生んだ作品ぢやありませんね』

『むつかしい事を云ひ出したのね。私にや、わからない』

房子は冷やかな調子で云つた。

『つまり、愛ですな。天才以上——藝術以上——愛——愛ですな』

と、三好は吃々とどもつて、

『ダ・ギンチは、あのモナ・リザ・ショコンダを愛してゐたのです。愛してゐたから、あの立派な繪が、不朽の傑作が描けたのですよ。都築のあの作も、都築の天才——たしかに、あの男は天才

ですよ。たしかに天才の名に値する男ですよ。だが、あの男の天才だけで出來た作ぢや無いんですな。あの男の愛があの作を生んだのです。あのモデルですな、あれはあの男の戀女房なんです。あの男はあの細君を愛してゐる。本當の深い愛で、あの細君を愛してゐる。あの男の愛が、あの男の藝術を鼓舞したんですよ。いや、すべての藝術は愛から生れる。愛が藝術の母胎なんです！』

『ふゝ！』

房子は、鼻の先で笑つて、唇を嚙みしめるやうにした。而して云つた——。

『ぢや、つまり、奥さんのおかげで、あの人は、あの繪が描けたつてわけなのね』

『まあ、然うです。然う云つてもいゝですな』

『ふゝ！　そんなにおむつまじくつていらつしやるの』

『魂の底から、深く愛し合つてゐるんですな』

『魂の底から——？　魂つて、一體どんなものなの？』

と、房子は、すこしうるみを帶びた眼に、嘲笑的な意地の惡い表情を浮べて、

『本當に、人間には魂なんてものがあるのか知ら？』
『それは、あるのですよ。あるのですよ』
三好は、狼狽しながら云つた。
『ぢや、三好さん、あなたの魂はどんな魂？』
『どんな魂つて、それは――それは――』
と三好は口籠つたが、
『奥さん！　僕だつて藝術家である以上、藝術家の魂はもつてゐるんです。僕だつて魂の底から愛して――愛してゐるのですよ。僕にだつてモナ・リザがあるのですよ』
『ほゝゝ。藝術家の魂だか、犬の魂だか――』
『ひどい事を仰有るですなあ。犬の魂は酷い。酷過ぎるですよ。奥さん』
三好は、鼻梁に皺をよせて泣くやうに笑つた。併し、その笑ひの裡に例の道化役者の媚を潜めて、
『いや、犬かも知れません――奥さんの眼から見たら、犬のやうなものかも知れませんが――犬

なら犬でも結構ですが、しかし、僕が犬であるにしろ、僕の魂は藝術家の魂です。いや、僕だつて都築なんかに負けやしませんよ。奥さん、僕はあなたにお願ひがあるのです』
『どんな事』
『僕に、あなたを描かして下さい』
さう云つて、房子の顏を見た三好の眼は、眞劍に輝いてゐた。
『私を？　描かして？』
『お願ひです。どうぞ、僕の爲めに姿勢をして下さい。僕は、あんな繪なんかに負け無い、立派な繪を描いて見せます。屹度書いて見せますよ』
『私にモデルになれつていふの？』
『どうぞ、お願ひです。前からお願ひしようと思つてゐたんですが――』と、三好は鋭く迫るやうに、『奥さん！　僕の一生のお願ひなんです、僕は文字通り心血を傾けて描きますよ！　命も魂も打ち込んで描きますよ。いや、その一枚の繪が描けさへすりや、僕はそのまゝ死んでもいいのですよ！』

三好は、ぐい〳〵と卓に胸を押しつけ押しつけ、蜘蛛の脚のやうに細長い指先をわな〳〵とふるはしながら、紙巾を引裂き引裂き、一語々々に力を籠めて云つた。輝く眼、ひく〳〵とひきつる顏――その思ひ迫つた表情はむしろ凄氣を帶びて、それが、持前のおどけ顏を、へんにグロテスクなものに見せたのであつた。

『だつて、そんな事――』

房子はさう云つて笑はうとしたが、三好の顏を見ると、笑ふ事が出來無かつた。

秋の雨

靜代は、專一の枕許に坐つて、內職の針仕事をしてゐた。――十燭光の電燈が、力無くあたりを照らして、忙しく動く指先の針がちか〳〵と光つてゐた。膝の上には、華美な友禪縮緬が、色彩を亂して流れてゐた。

靜代は、時々、針の手を止めては、仰向に寢てゐる專一の顏を見た。寢ついてからもう二十日ばかりになる專一の顏は、蒼ざめやつれて、尖つた顎のあたりには髯がのびてゐた。白茶けた

唇を半ば開いて、すう〳〵と、力無い寢息を立てゝゐるが、時々、眉のあたりをぴく〳〵と動かす。廣い額にはもじや〳〵と髮がみだれて、眼窪もげつそりと落ちてゐる。――それを見ると、靜代は、思はずほつと溜息を吐くのであつた。

靜代は、その眼を移して、壁際の簞笥の上を見上げる。そこには、型ばかりの佛壇が置かれ、香の煙がゆるく立ちのぼつて、「貞松院……大姉靈位」と記された白木の位牌が、ぼんやりと浮んでゐる。彼女の母は、四月ばかり前、今年の春の暮に亡くなつたのであつた。

母の死。その涙が乾かないうちに、かうして夫の病氣。たのしい新婚の日につゞいて、靜代には苦しい試錬の時がやつて來たのであつた。

『だが、お前は幸福だ。都築さんが、あんなに大事にして呉れるんだからね。阿母さんも安心して死ねる』

母は然う云つて死んだ。――その通り、自分は本當に幸福だ。どんなに貧しい不足勝な生活にせよ、かうして送る相愛の日には靜かな深い喜びがあるのだ。

だけれど、此の御病氣は――と、靜代は、再びうれはしげな眼を、夫の寢顏に戻すのであつた。

仕事に無理をして疲れたところへ風邪を引いて、それから肋膜を少し痛めただけの事で、別に心配する事は無いと醫師は云つてゐたが、しかし、經過がどうも思はしくなかつた。醫師の言葉は氣休めで、本當は、案外悪いのぢやあ無いかといふ氣もする。若しや――と、不吉な想念は黒い翼を眼の前にひろげる。

それに母の死の前後に、僅かに殘されてゐたものも皆費ひ果し、專一は病氣以來勤めに出ないので、その方からの收入も杜絶える。かうして賃仕事などをして見たところで、何の足しにもなるものでは無かつた。醫師への拂ひは未だしも朝夕の支度もさしつかへ勝ちな現狀を思ふと、靜代は、今まで何にも知らないお嬢さん育ちであつただけに、途方にくれざるを得無いのであつた。

靜代は、針の手を膝の上に置き忘れてぼんやりと考へ込んだ。――外には秋雨がしと〳〵と音を立てゝゐた。

ふと、格子戸のがらりと開く音がした。

『御免下さい』

といふ聲が續いてする。

靜代は、はつとして膝を立てた。而して、もう一度、夫の寢顏を覗き込んでから、起ちあがつて、そつと玄關の方へ出た。

出て見ると、それは二三軒置いた先の、仕立物の仕事を分けて呉れたりして、種々と好意を見せて呉れるおかみさんであつた。四十ばかりの、何處となく、賣色上りといつた感じのする女で稍〻輪廓の崩れた長目な顏の、すこし反齒の前齒には金齒がちら〳〵と光つてゐた。

『あら、をばさん』

靜代は、おかみさんの笑顏を、同じ笑顏で受取りながら、

『どうぞ、おあがり下さいませ』

『さうしちやゐられないのよ』

おかみさんは、べたりとそこに腰をかけて、障子の蔭から半身をくねらせてのぞき込むやうにして、

『一昨日、お頼みしたあれね。未だですの?』

『あの――未だなのでございますけど――つい、病人の方に手をとられるもんでございます

から――』

靜代は云ひにくさうに云つた。

『いゝえ、未だならそれでいゝのよ。別に急ぎのぢやあ無いんだから。――で、旦那さん、どんな具合なの』

おかみさんは慣々しい調子で云つた。

『矢張、どうも思はしく無いのでございますよ』

『いけないわねえ。本當におくさんも大へんですよねえ』

と、おかみさんはそこで一寸聲を落して、

『あんた、此間、何處かへ勤めにでも出度いやうな事云つていらつしたわね』

『えゝ。――病人が少しよくなりましたら、働きに出て見ようと思ひますの？　事務員でも何でもいゝのですが――』

靜代は、次の間に寢てゐる夫を憚りながら小聲で囁くやうに云つた。

『あたしんとこの姪が昨日來ましたからね。種々、あんたの事を話して見たんですよ。姪は京橋

の方へ勤めに出てゐるんですがね、そんな、お美しい方なら、もう引張凧だつていふんですよ。――女事務員なんて、辛いばかりでいくらにもなりやしないし、それに表面堅いやうに見えても、内幕は却つていけないんださうですよ。丁度、姪の出てゐる店で、是非一人欲しいつて探してゐるところだつてんですがね』

『はあ』

と、靜代は、おかみさんの要領を得無い話振に思ひ惑ひながら、返事とも、きゝかへすとも無く云つた。

『いゝえねえ。ずゐ分、亭主持の人も澤山出てゐるんですつて、なあに、此方の氣の持ちやうですからね』

『どんなお店なのでございませう？』

『カツフエ・アマリリスとか云ふんですよ』

『カツフエ？』

『えゝ、女給と云へば體裁が悪いやうですけど、ウエトレスとか何とかつて、ずゐ分いゝとこの

お嬢様だつた人なども出て居るつて事ですがね』

『まあ！』

靜代は、思はず聲をあげた。而して、苦い笑ひを口もとに浮べた。苦笑で濟ますには、あまりに腹立たしい氣持だつた。彼女はひどいはづかしめに會つたものゝやうに、顏を眞赤にしたその樣子を見たおかみさんは、聊かてれた風だつたが、自分の親切が、相手にとつて、それほど怖ろしい親切だとは氣がつかなかつた。

『いゝえねえ。どうかと思つて一寸お話して見たまでなんですよ。——あたり前の、事務員の方がお望みでしたら、又、そつちの方も心掛けておきますがね』

と、おかみさんは少し不機嫌になつて云つた。

『ありがたう御座います。何分——よろしく——』

靜代は後半を口の中で云つた。

おかみさんが歸つて行つたあと、靜代は戸締りをしようと土間に降り立つと、足もとの黑い土の上に、一通の封書が落ちてゐた。

『おや、いつの間に郵便が來てゐたのか知ら？』

と呟きながらとりあげて見ると、宛名は、都築專一、差出名は、蒼穹會 展覽會 事務所としてある。靜代は、それを片手に座敷に戻つた。

眠つてゐると思つた專一は、ぽつかりと眼を明いてまじ〳〵と天井を見つめてゐた。

『あら、お眼覺めになりましたの？』

『あゝ。——何人か來てゐたやうだね』

『えゝ。青木さんのをばさんが一寸お玄關まで』

『青木さん？　あのお上さん實におしやべりだね。でも、割に親切なんだね』

『えゝ。親切な事は、ずゐ分親切な人ですわ』

靜代の顏には再び苦笑が浮んだ。

『僕はね。今、へんな夢を見たよ』

『どんな夢？』

『とてもへんな夢だつた』

專一は、呻くやうに云つたが、それがどんな夢であるかを語らうとはしなかつた。

『お手紙が來てゐましたわ。展覽會の事務所から――』

『事務所から？　何だらうな？』

專一は、靜代から手紙を受取ると、仰向いたまゝ、封を切つて讀んだ。讀んでしまふと、

『御覽』

と云ひながら、用箋一枚だけの手紙を、靜代の膝へ、投げるやうにした。

『あの繪が、賣れたので御座いますか？』

讀んでしまふと、靜代は聲をはずまして云つた。それは、出品中の『初夏』が、賣約濟になつたといふ事務所からの通知であつた。

『うむ。賣れたんだよ』

『ぢや、あれをお賣りになるの？』

『賣れた以上、賣らなければならないだらう！　兎に角、此の際助かるね』

『だつて、あれは――あれは――』

『賣らないつもりだつた。だから、わざと、買はせないやうにとてつもない直段をつけておいたんだがね。あの繪に、それだけの金を出すほど篤志な買ひ手なら、惜しいけどまあ賣つてもいゝぢやあ無いか？――ね、賣る事にしてお呉れ！　僕だつて實際賣り度かあ無いんだけどね』

『……』

『又、描くよ。あの繪はまだ十分にや描けてゐないんだ。――又、描く事にして、賣れたものなら賣るとしようよ』

專一は、靜代を慰め、同時に、自分自身を慰めるやうな調子で云つた。

『でも、此の橋田久雄つて人、どんな人なんでせう？』

それが賣約者の名であつた。

『さあ、聞いた事もない名だな。――が、兎に角、あの法外な値段で買ふくらゐの篤志家なんだから賣つてもいゝやうな氣がするね』

『それは然うですわね』

靜代も同意したが、彼女は、その睫毛の長い眼を灯に背けて何か悲しげにまたゝきしたのであ

つた。

裂かれた繪

假名を以て賣約濟みの札をつけて置いた都築專一の「初夏」が榛澤の邸に運びこまれたのは、展覽會の會期が終つて二三日經つてからであつた。

房子は、書生に命じて、包裝を解かせると、それを自分の部屋に運ばせた。

『そこの、ピアノの上に立てかけて頂戴』

風邪心地で、今、寢室から出たばかりの房子は、伊達卷一つのしどけない裾前から、長襦袢の色彩を溢して、窓際のソファに懶げによりかゝつてゐた。洗面の序に一寸クリイムをなすりつけただけの顏の色は、拔けるほどの白さが靑く沈んで、熱ッぽい眼眸が、ぼッと烟つたやうに見えた。寢くだれ髮が惱ましげに、一房二房額にみだれかゝつて、唇が眼立つて赤かつた。

『こゝで御座いますか』

書生は、その繪を、彼女の前の壁に寄せて置かれたピアノの上にさしあげながら訊いた。

『あゝ、さう。その花瓶が邪魔ならばおろしてしまつて』

と、房子は命じた。

房子は、斜めに窓からの外光を受けて、生々と浮びあがつたその繪姿を、吸ひよせられたやうな眼でじつと打眺めた。

房子はさうして眺めただけでは滿足出來なかつた。椅子から立ちあがつて、ふら〳〵と、まるでその繪の不思議な引力に引きつけられたといふやうに、その繪の前に寄つて行つた。そして、一尺ばかりの距離にぴたりと向き合つて、じつと眺め入るのであつた。

房子は、一個の作品として、その繪を眺めるのではなかつた。そこに描かれてゐる一人の女を、實在の女性としての一人の女を、いや、もつと、はつきりと云つてしまへば、自分の戀敵である一人の女を、自分を此の涯もない苦惱におとしいれて、戀の勝利にほゝゑんでゐる一人の女を、そこに眺めてゐるのであつた。彼女の眼は呪ひと怒りとの爲めに燃えてゐた。而して、彼女の靑ざめた顏は、ほのかに赤らみ、唇は血がにじむまでに强く嚙み締められて行つた。

『おい！』

不意に呼びかけられて、びつくりして振返らうとする房子の肩を、うしろからそつと抱くやうにしたのは、彼女の夫の龍彦だつた。龍彦は、葉巻をくはへた口もとに輕い微笑を浮べて、

『ははあ！　これだね』

と、房子の視線をたどつて、その繪に眼をやつた。

『これがそんなにいゝ繪なのかな？　兎に角これで千圓はすこし高いな』

龍彦は、先づそれを云つて、

『だが、君は、此の繪の何處がそんなに氣に入つたのだい？』

『私、別にこれをいゝ繪だなんて思つてはゐませんわ。世間の評判は高いやうで御座いますけど――。たゞ、あの方が困つていらッしやるといふ事ですから、それで買つて頂くやうに、あなたに御願ひしたんですわ』

房子は、龍彦の手を肩から振りほどきながら、靜かに斯う云つた。

『君は、あの男に大へんに好意をもつてゐるんだね』

『あの方、あなたの弟さんぢやございませんか？』

『それはまあ然うだが――彼奴、へんに片意地なんでね』

龍彦は苦笑して、

『だが、こゝに斯んな深切な保護者が居る事には、先生氣が附かないだらうね』

『買ひ手が、私だつて事が判れば、都築さんは屹度賣らうとは仰有らないに違ひありませんわ』

『どうして？』

『どうしてでも』

『はゝゝ。或はさうかも知れないな。何しろひどく片意地なんだから。――だが、この細君なかなか美人だね』

龍彦も思はずその繪姿に見とれるやうにした。彼も亦、藝術鑑賞家の正しい眼を以てしては、その繪を見る事が出來無かつた。彼には、第一、それだけの教養なり趣味性の洗煉なりが無かつた。大ブルジョアの後取息子として、息づまるまでの物質的飽滿の中に、唯、官能的の歡樂をのみ追求して生きて來た龍彦の眼には、その繪姿にも、唯センヂュアルな美しさをしか見る事が出來なかつた。彼は、あのN氏の演奏會の夜に、その繪の女性に會つた時、房子の美しさとはまる

きり別の、古風なしとやかな美しさを見て『こんなのも惡くはないな』と思つた。何氣ない會話の隙に、その好色的な眼を、ちよい〳〵と投げて、見れば見るほど見まさりのするその美しさに『これは素敵だ！』と心の中で叫んだ。『專一の奴！　なか〳〵うまくやつてるぞ！　少し生意氣だな』さうつぶやいても見た——。愛は純一である。まことの愛は一つに執する。が、單なる性的嗜好は、二つを求め三つを求める。つまり、その浮氣な目うつりから、一つの花を手にしながら、もう一つの花をも折り度くなるのである。龍彦は、今、その美しい繪姿を前にしながら、漫ろなる心の動きを禁じ得なかつた。

『うむ。なか〳〵美人だね。彼奴にや一寸勿體ないくらゐなものさ』

龍彦は、角ばつた顎をちよいとつきあげるやうにして、葉卷の烟をふうッと吹いた。

『……』

房子は、暗い顏をしてだまつてゐた。

『どうかしたのかい？』

『頭痛が致しますの』

『君は、頭痛持ちなんだね。よく、頭痛がするぢやあ無いか？』

『……』

『どこか身體が惡いんぢや無いかな？　溫泉へでも出掛けようぢや無いか？』

龍彦は、機嫌を取るやうに云つた。——龍彦は、實際のところ、此の戀妻の機嫌のとりにくさには、閉口してゐた。我がままとか、氣まぐれとか、そんな事は最初から承知で貰つたのだが、いつまで經つても打解けず、つんと濟ましてともすれば冷笑的な眼附で高みの方から見おろすやうなその態度——あなたなどの知つた事ぢや無いとでも云ひ度げに、始終、何かじつと考へ込んでゐるやうなその樣子——。龍彦は、むしやくしやとして來て、どうかすると、思ふさま罵るか毆りとばすかしてやり度いやうな、へんな狂暴な氣持になるのであつたが、しかし、彼女の魅力にすつかりまゐつてゐる彼には、そんな事は勿論出來なかつた。彼は、業を煮やしながらも、下手に下手にと出て、一生懸命に妻の機嫌をとりむすばうとするのであつた。

『時候もいゝし——どうだね、箱根へでも出かけて見ようか？　——箱根も月並だな、思ひ切つて、ずつと遠くの、さう〳〵、此間、河村が話してゐた淺蟲の方へでも行つて見ようぢやない

か？』

龍彦は、房子がぐつたりと身を投げかけてゐるソファに身體を摺り寄せるやうにして云つた。

が、房子は、瞳を据ゑ、唇を嚙んで、夫の言葉は耳にもかけず、强情に自分一人の考へを追つてゐるといふ樣子だつた。

『房子さん！』

それを見ると、龍彦もその苛立を抑へきれなくなつたといふ風に、

『君は、何か考へてゐる事があるんですか？』

妙に改まつた口調で云つた。

『……』

『何か、僕にかくして、考へてゐる事でもあるんぢやないのかい？』

房子は、ぴりゝと濃い眉を動かして、肩ごと首を振つた。而して、憎々しげな眼で夫を見上げて、

『あなた、後生ですから、お煙草を止めて下さいな。私、その匂ひ大きらひなんです』

『何だって？』

『どうぞ、私を一人にして置いて下さいな』

龍彦はむつとした。而して、やゝ頰を赤らめて何か云はうとしたが、辛うじて氣を換へると、荒々しい足音を立てゝ、部屋の外へ出て行つた。

その夜、龍彦が、かなり醉つて家に歸つたのは、もう十二時過ぎてからだつた。

『奥さんは？』

女中に聞くと、

『夕方から御氣分がお惡いさうで、お部屋へは何人もお寄せつけなさいません』

と答へた。

龍彦は、房子の部屋へはいつて行つた。房子は、燭光を弱められた電燈の、淡い明るみの中に、青白い顏を浮べて眠つてゐた。眉のあたりが押しひそめられて、激しい內心の苦悶を思はせるやうな、凄味を帶びた表情が、その寢顏の上を漂よつてゐた。

龍彦が更に醉眼をみはつてその枕もとに近く、疊の上に、額縁の金色をほのめかしながら平に横はつてゐる繪を見た時、思はず、

『あ！』

と聲をたてた。そこに描かれた女の姿が、鋭利な双物か何かで、縱横に、めちやくちやに切り裂かれてゐたのであつた。

職業婦人

靜代は退けの時間が待遠だつた。三四人の同僚と、机を並べて、タイプライタアを打つたり、帳簿の整理をしたり、そんな仕事にいそしみながらも、彼女の心は家に在る夫の上を離れなかつた。仕事の手が隙くと、何かこそ〳〵話をしては、ついさゞめきの聲をあげて、隣室の禿頭の課長に叱られはしないかと慌てゝ口を噤んだりする同僚達からも孤立して、靜代は一人ぼんやりと思ひ沈むのであつた。靜代は病める夫の爲めに、斯うして職業婦人となつて毎日の勤めをしてゐる。だが、專一は酷くそれを可厭がつてゐる。最初、この會社に出る事にしたのも、靜代が專斷

で、專一には默つて定めたので、その時にも專一は大へん機嫌を惡くしたのだつた。

『可厭だ！　そんな事あ可厭だよ、君を勤めに出すなんて、そんな事あ死んでも可厭だ、第一、僕に默つて定めるなんて、そんな法は無いんだ。靜代さん、僕あ許さないよ』

專一は、眞赤になつて云つた。靜代は、その時初めて、專一から荒々しい言葉を聞いた。叱られるのは悲しかつた。が、それも、それほど自分を愛して呉れるからだと思ふと、靜代の悲しみは、感謝の爲めに二重にされる。本當に、いかに彼が彼女を愛してゐる事か？　しかも、いかなる愛も、餓を充たす事は出來ない。もし、靜代が外へ出て働らかなかつたら、二人は餓ゑ死なねばならないであらう。

『だつて、さうするより外仕方がありませんもの。ね、あなたの病氣がよくなるまで――それまでですわ。それまで私に働かせて見て下さいな！』

靜代は涙と共に專一に請うたのであつた。

『僕は、辛いよ！　死ぬより辛いよ！　あなたを職業婦人にするなんて！』

『でも、一時の事ですわ。ですから――』

『否！　金なら僕が造つて來る。僕は、今日にも、彼處へ行つて來る！』

あすことは？　それが榛澤家を指すのである事は問ひ返す迄も無く明らかであつた。

『だつて――』

『兎に角親父なんだ。事情を云つて頼みさへすれば、何とかして呉れない事は無い筈だ』

專一は、しかし、その言葉の下から、どう云つてその父の家から出て來たかを思ひ返す。どんな事があらうとも、決してあなたの厄介にはならない。然う、立派な口を利いて出て來たのだ。今に後悔するぞ、その時になつて吠え面を提げて來るなといふ父の言葉に、たとへ餓死すればとて決して再びあなたに縋りはしないと、立派に云ひ切つて出て來たのだ。

『だつて、それはいけませんわ。それぢやあなたの――』

と、靜代は涙の底から、淑かさ優しさのなかに深く裏んだ勝氣の色をきらめかす。それに榛澤家といへば直ぐにあの房子の存在を聯想せずにはゐられない靜代だつた。

『意地が立たないと云ふのだらう？　だが、此の場合、背に腹は換へられないのだ。僕は行つて來る』

行つて來る！　と口では云つても、そこまで身體を運んで行く事さへ出來ぬ專一の健康狀態では無いか？――いや、たとへ健康がそれを許しても、決してそんな事の出來ない專一である事を、靜代はよく知つてゐた。それを專一が云ひ出したのは今に初まつた事では無かつたが、實際、榛澤家へ出かけて行く事は、彼の誇りが許さ無かつた。

『ね、何でも無い事なのよ、私、いくらか進んでやつて見度い興味もあるのよ。だから、まあ暫く私の考へに任せておいて見て下さいな。私、あなたの爲めにいくらでも、私といふものが役に立つと思ふと嬉しいの。私を、役に立たせて見て下さいな。ね、ね、專一さん』

靜代は仰臥してゐる專一の顏に、自分の顏を重ねる樣にして、且つ慰め、且つ頼むのだつた。じつと閉ぢた專一の眼の、瞼を壓しあげて、一滴二滴とたまつた涙は、病みつかれた頰を傳つて口尻から顎の方へとしづかに流れるのであつた。

勿論、家に殘された病人の爲めに、一人の婢のやうな者を雇ひ入れる事などが許される狀態では無かつた。幸ひ、二軒長屋の隣のお上さんが好意を有つてゐて呉れるので、何彼と留守のうちの事を氣を附けて貰ふやうに頼んでは置くのだが、靜代は、人一倍淋しがりやの夫が、獨り不

自由な病の床で、どんなに自分の歸りを待つてゐるだらうと思ふと、朝出るとから、直ぐに退けの時が待遠しかつた。

『八代さん』

急ぎのタイプライタァを――タイプライタァと云つても、それは邦字のだつたが、彼女の明敏な頭腦と、器用な手先とは、すぐに非常な熟達を示した。尤も、時々、その放心の爲に脫字をしたりする事が無いでは無かつたが――打ち終へて、課長に差出して歸つたあとの暫くの手隙を、ぼんやりと例の物思ひに沈んでゐると、突然、斯う隣机から呼びかけたのは、英文の方のタイピストとして、もうずつと前から此の社に勤めてゐる竹山喜美子といふ二十五六の獨身婦人だつた。彼女は、色白の丸顏の、稍〻、眼の窪んだ、西洋人形めく表情のハイカラな、しかし、ひどく蓮葉な感じのする女だつた。

『え？』といふ眼を、靜代はその方に振向けた。――外の二人の同僚はその時、そこにはゐなかつた。

『あなた、何か考へ込んでいらッしやるのね』

靜代は、少しおど〳〵として赤くなつた。

『いつも、何か考へ込んでいらッしやるのね』

喜美子は、微笑を含んだ眼で、靜代の顏を眺めながら繰返した。

『いゝえ、別に――』

『隱しても駄目よ。何をそんなにいつも考へてばかりいらッしやるの？　何か心配な事でもおありなさるの？』

『いゝえ』

穿鑿的な鋭い視線を避けるやうに靜代は面を伏せた。

『どうして、あなたのやうな方が、職業婦人なんかにおなりになつたの？』

『……』

靜代はどう答へていゝか判らなかつた。

『あなたは、まさか矢澤さんのやうに、婦人勞働問題の體驗的研究とやらの爲に、こんな、勤めをおはじめになつたのぢや無いのでせう？』

『私、都合があつて、どうしても働かなければならなくなつたものですから――』

靜代は低い聲でとぎれ〳〵に云つた。

『然う？　あなたは屹度つい近くまでは立派なお邸のお嬢さんだつたに違ひ無いわ。何か急に不幸な運命に見舞はれて、こんな職業婦人などに身を落した――まあ、さう云つたお身の上なんぢや無いか知ら？　と私思ふのよ。尤も、これは、私だけの想像ぢや無いの。あの社長の秘書をしてゐる宮垣さんね。御存じでせう？　亞米利加歸りの、へんにハイカツた、そら、大きな柘榴石の襟針を自慢さうにひけらかしてゐるあの氣取り屋さんよ。あの人もそんな風にあなたを觀察してゐたわ。あの人、すつかり、あなたを信仰してゐるのよ。あの人あれで迚も凄腕だつて評判ですから、あなたも御用心なさらなければいけませんわ。尤も、社長さんの御親類ではあるし、あの方のお父様は此の會社の大株主なんでせう。あの方洋行先からつれて來たヤンキイ娘に逃げられて、しきりに二度目のお嫁さんを物色中なんださうですから、案外眞劍なのかも知れないのよ』

『まあ！』

先づ第一に、そんなに急に慣々しく話し掛けられた事に驚いた靜代は、更にその言葉のあまりに放恣な調子に驚いた。而して、腹立たしさと耻づかしさとで思はず顏が火照るのだつた。

『私なんか、お母さんのお胎から、まあこんな職業婦人に生れ附いたのかも知れないけど、あなたは違ふわ。本當にこんな事をしてゐたつて詰まらないのよ。斯うして朝から晩まで働いても月給と云つたらほんのぽッちり、鼻紙代にも足りやしない。考へて見れば馬鹿々々しいつたら無いわ。あなたなんぞ、そんなにお美しくていらッしやるんですもの。どんなにでも、外にやり方があるんぢや無いの』

『でも、別に仕方が無いんですわ』

『ねえ、私、ある人から賴まれてゐる事があるのよ』

と、喜美子は一段聲を落して、

『それは、あの宮垣さんぢや無いのよ。宮垣さんとはまた別の人なのよ。此の會社の人ですけど宮垣さんよりずつと高い位置にゐる人なの、その人から賴まれてゐるのよ』

靜代は喜美子の言ふ事が判らなかつた。靜代は、物惑はしげに、そのおしやべりな同僚の顏を

見上げた。

『その方は、宮垣さんのやうなおつちよこちよいぢや無いのよ。宮垣さんなどよりずつと信用の出來る人なのよ。その方がね、あなたと會ひ度いと仰有るのよ』

『……』

『若し、あなたがお可厭で無ければ、今度の日曜に、おうちの方へ遊びに來て欲しいと仰有るのよ。その方ね、まだ獨身でいらッしやるのよ。あなたのお身の上を伺つたりした上で、お力になれるものならお力にもなつて上げ度いと云つていらッしやるんですけどね』

『まあ！』

靜代は、小聲で叫んだ。

『その方は決して宮垣さんのやうな不良ぢや無いのよ。どこまでも眞面目なのよ。だから、ね、とにかく會つて御覽にならない？　私に伴れて來て呉れと仰有るの。私と二人でなら構はないでせう』

喜美子は、熱心に云つた。靜代は聞くさへ耳が汚れるやうな氣がして、血の退いたあとの青白

く引緊めた顏を横に反らし、答へ惑つて押默つてゐた。

そこへ、同僚の矢澤時子が、課長室の方から歸つて來たので再び何か云ひかけた喜美子は、それなり口を噤んだ。

『いやんなつちまふわ！　また、やり直し』

時子は、手に持つた幾枚かの書類を――今、打ちあげて課長の許へ差出した註文書きを、机の上に叩きつけて、大きな身體を椅子に投げかけるやうにした。時子は、肥つた、色の黑い、どちらかと云へば醜い女だつた。女子大學の社會科を出て、婦人勞働問題の研究の爲めに、まづ、職業婦人としての生活を體驗す可く此社に職を求めたのだと彼女自身では云つてゐたが、自分より三つ四つ年下の若い大學生と共同生活をしてゐるとかで、『あの人、あれでなか〳〵なのよ』と、喜美子が囁いた事があつた。

『また、お目玉なのよ。本當に可厭んなつちまふわ！　あの禿頭ッたら私ばかり目の敵にしてゐるんですもの、依估ひいきも斯う露骨にされちややり切れないわ。何をしても美しい人は得ね。職業婦人の半分の價値は、つまり上役の男共の鑑賞品たるところにあるんだと私思ふわ。だか

ら、職業婦人の資格は何よりも先づ美しい事なのよ』

時子は斯う云つて靜代の方をじろりと見た。

『ほゝゝ、大に憤慨しちやつたわけね。それが、つまり、あなたの御研究の結論なのね』

と、喜美子がまぜ返すやうに云つた。

『然うよ、女事務員なんて、要するに珈琲店の女給などと同じものなんだわ。男共の鑑賞品であるといふ點に於いてね。いゝえ、鑑賞品ならいゝけど、玩弄品なんだわ。而してその人が、美しければ美しいだけ玩弄品としての價値は加はつて來るわけなんだわ。つまり、女事務員も、珈琲店の女給仕も、それからもつと下等のある種の職業女たちも、職業婦人としての本質に於ては些とも變りが無いんですわ』

時子は、冗談なのか眞面目なのか、本當に、憤慨してゐるのか、唯氣輕にふざけてゐるのか、どつちとも判らないやうな調子で、こんな事を喋り立てた。

『まあ、酷い事を云ふのね。そんな事を云つて、それは自ら辱かしめるといふもんぢや無くて——私、職業婦人の名に於て、斷じてあなたに抗議するわ』

喜美子も、冗談だか眞面目だか判らない調子で、笑ひながら云つた。

『あなたに抗議する資格がおありでしたら』

時子はわざと鹿爪らしく云つた。

『まあ、失禮な！　私は村松さんとは違つてよ』

その時、その村松富子が——もう一人の同僚が、ばた〳〵とスリッパを引摺つてはいつて來た。富子は、少し眼尻の下つた眼と、少し上に反つた鼻と、少し大き過ぎる口とを有つた娘だつた。おしやれな彼女は、際さへあれば廊下の鏡の前へ行つて粉白粉を刷いてゐる。それで、いつでも眞白な顏をしてゐた。

『なあに？　何が私とは違ふのよ？』

富子は、三人の顏を順々に見ながら、頓狂な調子で云つた。

時子と、喜美子とは顏を見合せて、くす〳〵と笑つた。

『何云つてゐたの？　私の事を？』

『何にも云つてやしないわ』

喜美子は、然う云つて、再び聲を立てゝ笑つた。

歸り途

靜代の美貌は、此のビルデイングに勤めてゐる多くの女事務員の中でも、一際目立つてゐた。けば〳〵しく華やかな、はねッ返りの、モダン風なそれ等の女達の群を、紅に紫に咲き亂れた一束の花にたとへるならば、靜代は、その中でたつた一輪の白い花だつた。彼女の有つ優雅なクラシックな美しさは、その憂鬱の爲めに一層の深みを加へて、質素な服裝も却つて高貴な氣品にふさはしかつた。エレベエタアの中でこつそりと手を握つたり、廊下の摺れ違ひにいきなりいやらしい笑ひを投げ掛けたりするやうな逞しい不良の輩も、靜代には、さすがに然う易々とは手出しをしなかつた。

『素敵だね』

『あゝいふ美しさは、今時一寸珍らしいね。マドンナのやうな、眼をしてるぢやあ無いか？』

そんな風に囁き合ふ者もあつた。——而して、その立ちすぐれた氣品故に、彼女を、何か非常な大ブルジョアか何かの娘が、事情あつてこんな境遇に身を落したのだと思ひ取る者が多かつた。勿論、彼女は何一つ身分に就て語らうとはしなかつたので、彼女が既に人妻である事は、彼女の同僚達と雖も知らなかつた。彼女は、その同僚達とも仕事の上の用事の外には殆ど口を利かなかつた。歸りの電車にも出來るだけ一人で乘るやうにした。

その日も靜代は、退けの時間が來ると、こつそりと人目を避ける樣にして、建物の外へ出た。而して、ラツシュアワアの電車の片隅に疲れた身體を押揉まれながら、白いしなやかな手を吊革に託けてゐた。

歸り急ぐ心には、電車の進みももどかしかつた。——今日はどんな工合か知ら？　涼しさに向つたので、病人も案外元氣が出て、今朝などは大變機嫌がよく、今日は起きて見ようなどと云つて居たが、此のまゝ、ずつとよくなつて呉れるか知ら？　此の分なら心配する事は無いと、醫師も樂觀的に言つてゐたが、あれは氣休めでは無いのか知ら？　海岸の空氣のいゝところで靜養するのが一番いゝ事は知れてゐるけれど——などと、醫師への藥禮が辛とである現狀を考へたりして、彼女の心は明るくなつたり暗くなつたりした。

『八代さん』

ふと、呼びかけられて、吃驚して振返ると、すぐ眼の前に、顏と顏とが觸れ合ふばかりにして、一人の紳士が笑つてゐた。眉の濃い、色の淺黑い、顎のやゝ角張つたその男は、彼女のつとめてゐる會社の、會計課長をしてゐる柳瀨勝介であつた。

『……』

靜代は、あまり思ひがけなかつたので、狼狽して赤くなつて會釋を返した。

『八代さんのお宅は何方ですか?』

『あの、牛込の方でございます』

『牛込のどの邊なのですか?』

いかつい顏に似合はない優しい聲で聞いた。

『飯田橋のすぐ傍でございます』

『この電車ぢやあ毎日大へんですね。――朝の方がもつと混みますか?』

『はあ、ずゐ分』

靜代は口の中で答へた。

『お! ここで、ぢやあ乘換へですね』

『は』

丁度、乘換の停留場へ來たので、靜代は會釋をして降りようとすると、

『私もこゝで降りるのですよ』

と、柳瀨はさきに立つて、がつしりとした廣い肩の陰に、靜代をかばふやうにして先に降りた。

『實はね、私は、あなたのあとを跟けて電車へ乘つたのですよ』

柳瀨は、電車を降りると、靜代と歩調を合せて並んで歩きながら、斯う云つた。

『まあ!』

『はゝゝ! 驚いたんですか?――あなたのあとから直ぐに乘つて、ずッと、あなたの傍に立つてゐたんですよ』

『――私、些とも存じませんでした』

『八代さん、私は、あなたにお話して見度い事があるのですが――ね　何處かで、夕飯でもつき合つて下さいませんか？　突然で非常に失禮なんですが――』

『いゝえ、私――』

『あの竹山さんにも一寸頼んで置いたのですが、僕の家へ遊びにでも來て頂けると非常に結構なんですが、竹山さんと一緒にでも來て頂けたらと、あの人を通じてお願ひはして置いたのですが――いや、突然にこんな事を云ふと、あなたは嘸へんな奴だと御思ひになるんでせうがね』

靜代は、今日の喜美子の話を思ひ出した。忌々しい氣持で、その時は、ろく〳〵耳にも止めずに聞き流したのだつたが、それでは此の男だつたのか？　――靜代は不快な腹立しさを感じながらも、此の場合唯當惑するより外無かつた。

『あなたのお身の上も、實はよく知つてはゐないのですがね、見たところ、あなたは今大へん不仕合のやうですが――實際、あなたのやうな人があんな勤に出られるに就ては、種々の御事情もあるのだらうと思ふのですが、若し出來るなら、お力になつて上げ度いと思ひましてね』

柳瀨は、靜代の方に身體をすりよせるやうにして言ひ續けた。三十を三つ四つ越してゐるらしい彼の言葉には、いかにも中年者らしい落着と、眞面目さとが籠つて居たが、同時に、中年者らしい圖々しさも感じられた。

『ありがたう御座います。でも私――』

と、靜代は口籠つた。彼女は、一刻も早く此の無作法な男の傍から離れ度いと心にあせつた。

『兎に角、こんなところぢや話は出來ません。どうです？　一寸其邊で簡單な飯でも食べようぢやありませんか。つき合つて下すつてもいゝでせう』

『ありがたう御座います。でも、今日は私急ぎますから』

靜代は小聲で、しかし、きッぱりと云つた。

『まあ、いゝぢや無いですか？　ね、唯、飯を食ふだけですよ。決してお手間はとらせませんから』

『いゝえ、私、急ぎますから――。御免下さいませ』

と、靜代は電車の方へ走り寄らうとした。

『まあ、待つて下さい』

と、柳瀬は靜代の袂を、おさへる樣にして、

『ぢや、せめてその邊まで、ほんの二三分でいゝのですから、一緒に歩いて下さい。ね、次の停留場まで』

それも可厭だとはさすがに云ひ兼ねた。それに、乘らうとした電車はもう出て了つたので、靜代は、仕方なしに男の後について歩き出した。

『八代さんは、御兩親はおありなんですか？』

柳瀬は、十歩ばかりの無言の後に、かう靜代を見返り乍ら聞いた。

『いゝえ』

と、靜代はかぶりを振つた。

『ぢや、お亡くなりになつたんですか？』

『えゝ』

『お二人共？』

『えゝ』

『さうですか、ぢや、御兩親共お亡くなりになつたんですね。で、御兄弟は？』

『兄弟も御座いません』

『ぢや、まるきり一人ぼつちなんですね。そして、今どうしていらつしやるんです？』

靜代は答へなかつた。無作法な、立ち入り過ぎたそんな質問に、答へる必要はないと思つて、彼女は堅く口を噤んでゐた。彼女は唯、この不愉快な抑留から早く逃れ出さなければと、そればかり考へてゐた。彼女の歩みは。自ら早くなるのだが、柳瀬は慌たゞしい行人の中を、のろ〳〵と歩いて行つた。

『親も無し兄弟も無しぢや、隨分お心細いでせう。他には別に力になる身寄りと云ふ樣なものも無いんですか？』

『身寄りが無いわけでは御座いませんが』

と、靜代はうるささうに云つた。自分が既に結婚し、既に夫を持つ身である事を、最初から全然想像に入れてゐないらしい男の言葉が、笑止なものに思はれた。私はもう結婚してゐるのです。夫を持つ身なのです。はつきりとかう云つてやらうとも思つたが、それも變なので、靜代はその

儘口を閉ぢた。

『ねえ、八代さん、さういふお心細いお身の上なんだつたら、尙更です。どうです。私が一つ力になつてあげようぢやありませんか？　實際、あなたの樣な人が、安月給の事務員になるなどとは勿體無さ過ぎるといふものですからね。はゝゝ』

柳瀨はとつて附けたやうに笑つた。

『ありがたう御座います。でも、私――』

『こんな事を云ふと、私が何か野心でもあつて、親切ごかしにあなたを弄ばうとでもするやうにお思ひになるかも知れませんがね、決してそんなわけぢや無い。私は極めて眞面目なのです。あなたを見た最初から、私は妙にあなたに牽き附けられて、年甲斐も無いとお笑ひになるかも知れないが、どうもあなたの事が忘れられんのでね。それで、こんな不良少年染みた眞似をして、あなたを迷惑がらせるのですが、せめて、私の心持だけでも聞いて頂け無いでせうかな』

柳瀨は、熱ばんだ、執拗な視線を靜代の横顏に搦むやうにして、少し皺嗄れた聲で說き立てるのであつた。

『御親切はありがたう御座いますけど、私、別にそんな――』

と云ひさして靜代は口籠つた。そんな御親切は本當に迷惑です！　とは流石に云ひ兼ねて、

『どうぞもう――。それに、私、今日は本當に急ぐので御座いますから』

靜代は、丁度その時次の停留場に來てゐたので、そこで歩みを止めてしまつた。

『さうですか？　ぢや、殘念ですが仕方がありません。――私はどうも少し性急過ぎたやうですね。あまり突然だつたので、あなたは吃驚なすつたんでせう。ですが、今云つた事は決して一時の冗談なぞぢや無いでのですから、そのつもりで聞いて置いて下さい』

『御免下さいませ。電車がまゐりましたから』

靜代は、皆まで聞かずに、お辭儀を一つすると、くるりと男に背を向けて、そこへ走つて來た滿員の電車の停まるのも待たずに夢中で飛び乘つたのであつた。

病みてあれば

靜代が家に歸つたのは、もう、家々の軒燈がちらほらと輝き初める黃昏時だつた。靜代は、狹

い露路を小走りにはひると、先づ隣のお上さんに玄關の格子戸越しに歸りを告げてから、裏口にまはつて、お勝手の方から家にはひり、

『唯今』

と、小聲に云ひながら、專一の寢てゐる六疊の襖を明けるのだつた。もし、專一が眠つてゐるのならば、その眠りを驚かしてはならぬと、靜代は、いつも音のしないやうにそつと襖を開けるのだが、彼女の斯うした心遣ひは大抵の場合無用だつた。何故といふに、專一は、大抵の場合、いかにも待ち兼ねてゐたといふ風に、まじ〳〵と大きな眼を見開いて居るのだから、而して、

『お歸り！』

と、靜代が聲を掛けるのと殆ど同時に答を返すのであつたから。

『唯今』

『お歸り』

この簡單な何でもない挨拶の中に、いかに深く、いかに切なる愛が籠つてゐる事ぞ。朝の七時半から晩の五時半までの、此の十時間足らずが、二人にとつては實に堪へ難く永い時間なのである。二人は、まるで十年もの別れの後でもあるかのやうに、その眼と眼とで互ひに縋り合ふのである。

『今日は、いかゞでしたの？』

靜代は、枕もとに坐つて、仰向に寢てゐる夫の顏をのぞき込むやうにする。

『今日は大へん宜かつたんだよ。先刻まで起きてゐたのだがね、少しくたびれたので又寢たところなんだ』

『然う？　無理をなすつちやあいけませんわ。でも、今日は大そうお顏の色が宜うございますわ』

『あゝ、この分なら、もう間もなくよくなるだらう。早くよくなつて、大いにやるよ。——だが、今日は歸りが遲かつたね』

『然う？　そんなに遲うございまして？』

『昨日より丁度二十分遲かつたよ』

專一は枕元に投げ出された銀側の懷中時計をとりあげてそれを見ながら云つた。彼は、その時

計と首引で、分を刻み、秒を追ひ乍ら、靜代の歸りを待つてゐたに違ひ無かつた。

『さうでしたか知ら？』

靜代は、大切な二十分を自分たちから盜んだあの不愉快な男の事を思ひ返しながら云つた。何となく、夫の手前に後目痛いやうな氣がした。

『靜代さん、あんたには本當に苦勞をさせるね』

『いゝえ、些とも苦勞な事なんかありませんわ。唯、あなたのお傍についてゐられないのが悲しいのですけど、でも、それは、仕方が無いのね』

『僕が意氣地が無いからだよ。本當に、靜代さん、あんたには濟まないと思つてゐる』

『まあ、そんな水臭い事を仰有るものぢやありませんわ。そんな事仰有つちや私可厭ですわ』

『隨分、可厭な事があるだらうねえ。可厭な奴が澤山居るだらうねえ。――僕はどうも、不安なんだ。氣になつて堪らないんだ。僕の大事のあんたを、碌でも無い人間共のうじよ〳〵してゐる處へ拋り出して置くのが、實際堪らないんだ』

專一は、憂鬱な顏をくちや〳〵と引歪めて苛立たしげに云ふのであつた。

『でも、私は大丈夫ですわ。そんな事なら、些とも心配なさる事は無くつてよ。私、しつかりしてゐるから大丈夫ですわ』

『それは勿論、信じてゐる。だが、感じとして可厭なんだ――。僕はね、先刻も一寸うと〳〵してゐる間に、迚も可厭な夢を見たんだ』

『まあ、どんな夢？』

『あなたがね、へんな男と二人で、船に乘つてゐるんだ、河だか沼だか分らないが、どす黑い水が波を打つてるんだ。そして、僕はその波の中で溺れかゝつてゐるんだ。あんたが、へんな男と一緒に乘つてゐる舟の方へ泳いで行かうとしても、どうしても手足が動かない。もがけばもがくほど水の底に引摺り込まれて行くんだ――。いやな夢ッたら無い』

專一は淋しい笑ひを含んで言つたが、その惡夢の名殘を追ふやうに、じつと空間に見据ゑられた眼には、病人特有の、鋭く研ぎ出された神經がぴり〳〵と慄へてゐた。

『まあ、いやな夢ね。どうしてそんな夢を見たりなさるんでせうね』

靜代も憂鬱に微笑しながら云つたが、歸途での事を思ひ合せると、何となくぎくりと胸を衝か

れたやうな氣がした。そしてわざと晴れやかな調子になつて、

『そんな夢を見たりなすつちやいやですわ。まあ、何て馬鹿らしい夢でせう？』

『僕はね、あんたの歸りが少しでも遲くなると、何か事が起つたのぢや無いかと、不安で堪らないんだよ。あんたが歸つて、斯うしてあんたの顏を見るまでは安心が出來ない氣がするんだ』

『まあ！　どうしてでせうね。――矢張、御病氣の爲めに、神經過敏になつていらツしやるからでせう。何も彼もみんな御病氣のせゐなんだわ』

『さうだ。何も彼もみんな病氣のせゐなんだ。早く快くなつて、僕が働くよ。僕が働けさへすりや、大事のあなたを、可厭な勤めなんかに出さずに濟むんだからね』

『えゝ。――でも、あせつちや不可いのよ。氣を揉んだりなすつちや御病氣に障りますわ』

靜代は、姉か母かのやうに、やさしく專一をなだめるのであつた。――が、さう云ひ乍らも何となく胸が迫つて、我知らず眼頭が熱くなるのであつた。

男の中

あの角顎の會計課長の、柳瀨勝介の執拗な眼は、それから後も絕間無く靜代を追ひ求めてゐた。靜代の仕事をしてゐるところとは、課も違ひ、室も離れてゐるので、然う繁々と顏を合はせる機會は無かつたが、それでも一日に一度か二度は、或は廊下の通りすがりに、或は化粧室への出入りに、靜代は、その妙に熱ばんだ、而して、薄氣味の惡い微笑を含んだ眼とぶつからねばならなかつた。

あの日から、五六日經つてからの、午休みの時間であつた。靜代が一人、仕事部屋に殘つてゐると、そつと扉をあけてはひつて來た柳瀨は、おど〳〵と赤くなつて、ふるへてゐる靜代にさり氣なく二言三言話しかけたりした末、一通の手紙を、彼女の卓の上の書類の下に突込んで、

『あとで讀んで見て下さい』

と云ひ捨てゝ出て行つた。

靜代は、そんなもの手にするも汚はしいと思つたが、矢張氣になるので、封を切つて讀んで見ると、自分は決して一時の氣紛れや出來心で、こんな事を云ふのでは無い。あり體に云へば、自分は心からあなたを愛してゐる。竹山さんからおきゝだらうと思ふが、私は二三年前妻に死別

してから、あなたと同様まつたくの一人ぼつちで、淋しい代り、何の生活上の煩累もない氣輕な身分である。こんな事を云ふのはをかしいが、私にはかなりの財産もある。あなたの生涯を安樂にするばかりでなく、多少の贅澤にも堪へるだけの十分なものを私はもつてゐる。――そんな事を書き記した上、兎に角一度ゆつくりと會つて貰へ無いか？　會つていろ〳〵と話して見れば、自分がどんな人間であるかもあなたに判り、また、あなたの希望も十分にお聞きする事が出來ると思ふから、などと、つまり、あの日歩きながら話したのと略同じやうな事が繰返されてゐた。

讀んでゆくうちに、腹立たしさがこみあげて來て、靜代はぴり〳〵とそれを引き裂いてしまつた。――今度、柳瀬に會つて、再びそんな事を言ひ掛けられたら、自分がもう結婚してゐるのだといふ事を告げて、きつぱり斷らうと思つた。

最初柳瀬の事を、靜代に話した竹山喜美子は、もう靜代に對して柳瀬の名を口にしなくなつたが、しかし、意味ありげな笑ひを含んだ彼女の眼は、いつも靜代の樣子を探るやうにしてゐた。靜代と柳瀬との間には、もう何かの交渉でも生じてゐるかのやうに思ひ取つてゐるらしく、思はれた。

『八代さんなんか、本當にお仕合せよ』

などと、皮肉らしい調子で云ふ事もあつた。それも靜代には腹立たしかつた。それから二三日後の、ある日の歸途に、靜代は停留場のところで、社長の秘書をしてゐる宮垣といふ男に呼び止められた。

『八代さん』

と、その大きな柘榴石の襟針をした色の白い男は、金緣の眼鏡の底の眼を細めて、髯の無い口もとでにや〳〵と笑つて、

『あなたに少しお話し度い事があるんですがね』

と云つた。

『どんなお話で御座いませう』

『社長から話して貰ひ度いといふ事なんですが、こゝでは、立話も出來ませんしね。どうです。一寸その邊に附合つて呉れませんか？』

社長からの話といふのが、ぎくりと胸に徹へた。若し、何か落度でもあつて、會社の方が不首

尾にでもなるのでは無からうかと思ふと、やツとの思ひで見附けた仕事であるだけに、靜代の心には暗い不安がこみ上げて來た。

『社長さんのお話つて、何んな事なので御座いませう？』

靜代は、不安を顏にあらはして、おど〳〵とした眼で見上げた。

『何あに、何でも無い事なんですが、一寸あなたのお耳に入れて置いた方がいゝと思ひましてね』

宮垣は相變らずにや〳〵と笑ひながら云つた。

『こゝで一寸話して頂くわけには行きませんでせうか？』

『然う簡單な話でも無いんです。まあ、十分ばかりでいゝんですから附合つて下さい』

宮垣は、云ひながら、もう、ずん〳〵、と靜代の乘つて行かうとする電車とは反對の方向に歩き出した。構はずに歸つて了はうと思つたが、社長からの話といふのが氣になるので、靜代は引摺られるやうにして、そのあとから重い歩みを運んだ。

停留場から五六十歩いつたところで、宮垣は手をあげて通りかゝりの自動車を呼んだ。

『一寸其處までなんです。でも、歩いちや大へんだ。どうぞ乘つて下さい』

宮垣は靜代を促がした。

『いゝえ、私急ぐので、ございますから』

『だから。これに乘つて下さい。歩いても直ぐなんですが——おい、カフエ・ドートンヌまでやつて呉れ』

と、宮垣は後半を運轉手に云つた。行先をはつきりさせて靜代に安心させようとするやうに。仕方が無かつた。靜代は自動車に乘つた。

そこまでは五分とはかゝらなかつた。

專一でない外の男と、二人きりで、そんな場所に身を置く事は、靜代にとつて全く堪へ難い事であつた。カフエ・ドートンヌの二階には、彼等の外には三組ばかりしか客が無かつた。裏町になつてゐるので、あたりの空氣が黃昏時のほの暗さのなかに妙にしんと落着いてゐるのも、靜代には何となく無氣味だつた。

『あの、どんな御話なので御座いませう？』

靜代は、腰をおろすとすぐに斯う聞いた。

『それは今お話ししますよ。まあ、お茶でもあがつて下さい』

『私、さうしては居られないので御座いますが――』

だが、宮垣は靜代の言葉には一向頓着無く、女給に飲物や食物やを命じて置いて、ポケットから煙草を取り出した。而して、ゆつくりと金口の煙を吐きながらその烟の中からにや〳〵と細い眼の笑ひを投げかけて、

『八代さん。あなたは、今の社へ出る前にはどうしていらしッたのです』

『家に居りました』

『學校は何處をお出になつたんですか？』

『府立の第二で御座います』

『さうですか？　ぢや、僕の妹と同じですね。僕の妹もたしか第二でしたから、若しかしたら妹はあなたを知つてゐるかも知れませんよ』

『まあ、さうで御座いますか』

靜代は、そんな呑氣な事を話し合つてゐる氣にはなれなかつた。早く、社長からの話といふのを聞き度かつた。

そこへ、女給仕が來て、カクテルの盃を、一つは宮垣の前に、一つは靜代の前に置いた。宮垣は、ぐつと一息に半分ばかり乾して、

『それは甘いのですよ。あなたもお上りなさい』

『どうぞ、御用のお話を聞かせて下さいまし』

靜代はもう一度繰返した。

『それは今申上げますよ。あなたも隨分性急ですね』

宮垣は、うまさうに盃を乾してしまふと、それを目の前にさしあげながら、女給仕の方を振向いて、

『おい、もう一杯！』

と命じた。

『あの、私、本當に急ぐので御座いますから』

靜代は哀願するやうに云つた。

『社長の話も、社長の話ですけれど、それよりも、僕自身、あなたにお話し度い事があるのですよ』

あまり酒に強くはないらしい宮垣は、一杯のカクテルでもう眼元をほんのりと赤めて、もう一度、いやらしいにや〳〵笑ひを投げ掛けた。

『まあ、私、本當に困りますわ』

『柳瀨さんがあなたに申込したといふ事ぢやありませんか。僕はそれを聞いて、しまつた！ と思つたんです。八代さん、僕はつまらん遠慮をしてゐたばかりに、あの朴念仁先生に先鞭をつけられたんです。だが、八代さん、僕は、あなたが柳瀨などに動く人ぢや無いといふ事を信じてゐますよ』

『……』

『あの男は、もと僕の親父の會社にゐた事があるので、あの男の事は僕も多少は知つてゐますが、あれは、迚もけちな男で、あの男の先の細君は、ひどい肺病だつたのをろく〳〵醫者にも掛けず

に見殺しにしたのだといふ評判があるのです。あんな男が、あなたにそんな申込をするなんて全く身の程知らずといふものです』

『私、本當に困るので御座います』

靜代はさう云つて、對手の顏を見上げて、

『私もう結婚してゐるので御座います』

『結婚してゐる？ ぢや、あなたは獨身ぢやあ無いんですか？』

『え〻。柳瀨さんは、それを御存じ無いものですから』

『さうですか？ それは、本當ですか？』

と、宮垣は、なほ半信半疑の顏附で、

『どうも信じられませんねえ。あなたが、もう人妻だなんて』

『ですから、どうぞ、もうそんな事は仰有らないでいたゞき度う御座います。——私、急ぎますから、別にお話がございませんのでしたら、これで失禮させて頂きます』

靜代は、かう云つて立ちあがりかけた。

『まあ、待つて下さい』

と、宮垣は慌てゝ止めた。

『あなたがもう結婚なすつてゐるといふのが本當ならば、それはそれでいゝのです。ですが、あなたが人妻であらうが無からうが、僕のあなたに對する氣持にかはりは無いのです』

宮垣は、瞳を据ゑるやうにして云つた。今までのにや〳〵笑ひはすつかり消えて、妙に、ふてぶてしい表情が、そのぎらりと輝く眼に、赤く濡れた唇に現はれた。

羊の皮

『はゝゝ。そんなにお驚きになる事はありませんよ。なるほど、僕の云ひ方は少し無作法だつたかも知れません。あなたが人妻でいらッしやる事が本當ならば——』

と、宮垣は疑ひ深い眼で、靜代を眺めながら、

『人妻であるあなたに對つて、こんな事を申上げるのは、誠に怪しからんわけですが、併し僕は信じるのです。結婚なんて一つの社會上の約束で、我々は何も、そんな窮屈な約束に囚はれてゐ

る必要は無いと。我々は、もつと自由に、大膽に、奔放に行動してもいゝ筈ぢやありませんか』

宮垣は、赤く濡れた唇から、犬齒の金をちらりと見せて、再び氣味の惡いにや〳〵笑ひを浮べた。

『まあ——』

靜代は、わなゝく眼で、對手の顏を見た。

『あなたがもう結婚していらッしやるなんて、全く意外です。——はゝゝ、今までそれを隱していらッしやるなんて、あなたも隨分人が惡いですね。柳瀨は屹度落膽するでせう。だがね、僕は——』

と、その自信の强いドン・ヂャンは、ウイスキイの杯を口もとに持つて行きながら、

『僕にとつちや、そんな事は問題ではないのです。結婚は結婚、愛は愛——一つは外面的な形式で、一つは內部的の必然です。此の二つは全然別のものなのです。此の點に就いちや、外國の女性はかなり徹底的な進んだ考へを持つてゐますね。阿米利加なんかぢや、既婚の婦人の方が、却て奔放な戀愛生活をやつてゐるんです。僕はあなたのやうな美しい婦人が、さうして化粧一つし

ない淋しい姿で、塵まみれになつて働いてゐるのを見ると、寶石が掃溜に捨てゝある樣な氣がするのですよ。あなたの夫がどんな人か知りませんが、僕は正直のところ、その人に對して憤りを感じますね。あなたのやうな人にこんな勤めをさせるなんて――勿論、それには種々の事情もあるのでせうが、兎に角僕は、あなたが、そんな結婚を選んだ事をあなたの爲に惜しみますね。いや、寧ろ腹が立つのですよ。あなたは自分の價値を知らないのです。あなたのやうな美しい人が、自分の價値を知らないで、さうして、自分をそんな風に粗末にしてゐるのを見るくらゐ、男性の心を苛立たせる事は無いのです』

宮垣は、雄辯にそんな事を語り續けた。彼は、卓に兩肘を突き、近々とその顏をさしよせるやうにし、醉の爲めか、妙にぎら〳〵と輝く眼で、――蛇の舌か何かのやうな無氣味な眼で、無耻に、無遠慮に靜代の顏を嘗め廻した。

『御免下さいまし』

靜代は再び立ちあがつた。彼女の頰は、激しい憤りで赤められてゐた。

『まあ、いゝですよ。お歸りになるなら、お送りしますよ』

『いゝえ。私もう――澤山で御座います！』

憤りの爲めに涙ぐんだ眼で鋭く睨みつけるやうにしながら靜代が卓を離れようとすると、宮垣は、いきなり手を伸ばして袂の端を握つて、

『逃げようッたつて逃がしはしませんよ。はゝゝ！　まあ、そこに坐つて僕の云ふ事を、もう少し聞いて下さい』

『いゝえ、私もう歸らなければなりませんから――』

靜代は、袂に手を持添へて、振切らうともがいた。その拍子に、卓の上の杯が落ちて、けたたましい音を立てゝ微塵に碎けた。

『あ！』

靜代が思はず聲をあげた時、その背後に足音がして、彼女の肩越に、ぬつと顏を出した者があつた。驚いて振返つたその額の上で、二重顎の、でつぷりと肥つた顏が、白い齒を見せて笑つてゐた。

『靜代さん！　あなたは、たしか靜代さんでしたね』

見ると、それは日外劇場で一寸紹介された、專一の義兄の龍彦であつた。靜代は、あまりの意外さに驚きながらも、

『あら！』

と、縋るやうな眼で龍彦を見上げた。

『しばらくでしたね。――ところで』

と、龍彦は、呆氣にとられてゐる宮垣の方に鋭い眼をやつて、

『大分お話がこみ入つてゐるやうですな。失禮ながら、先刻から其處で――』

と、龍彦は對立の蔭の方を眼で指して、

とつくりと拜聽して居つたのですが、はゝゝ！　なか〳〵名臺詞ですな』

君は一體何人なんです？』

度肝を抜かれてたじ〳〵となりながらも、宮垣は態度をつくろつて、かう冷やかに問ひ返した。

『僕は、此の婦人の身内の者です』

『身内の者？』

『さうです。僕は斯ういふ者です』

龍彦は、衣嚢を探つて名刺をとり出すと、色を失つた宮垣の鼻先にぐいと突きつけた。宮垣はふるへる手でそれを受取つた。

「榛澤龍彦」――それは初めて知る名では無かつた。財界に勢力のある榛澤家の嗣子として、近頃新橋邊で豪華を極めてゐる遊蕩兒として、ある一部では評判の『榛澤龍彦』だつた。

『ところで、君は――？　そちらの御名刺をいたゞきませうか？』

龍彦は傲然として云つた。

『僕は――僕は――』

宮垣は急にしをれて、おど〳〵と哀みを請ふやうな眼附をした。

『靜代さん。此の人はどういふ人なんです？』

龍彦は靜代に問うた。

『あの私の勤めて居ります會社の方で――』

評代は、口籠りながら二人の男の顔を交るゞ見た。

『勤めてゐる會社？　――あなたは何處かへ勤めてゐるんですか？』

『えゝ』

『さうですか？　ぢや、女事務員になつていらつしやるんですね。それで此の人が――うむ、よくある奴だな』

と、龍彦は再び宮垣へ冷笑を浴びせかけて、

『會社つて、何處の會社です』

『あの、M―商事會社でございます』

『M―商事會社？　うん、あのF―ビルディングの中の。あすこの社長はたしか大林周藏だつたな、大林なら、僕はよく知つてゐますよ』

『まあ、然うで御座いますか？』

『うちの親父とは、かなり親しい間柄なんだ。――いや、大林に少し忠告してやる必要があるな』

と、龍彦は、先刻から青くなつたりして赤くなつたりしてゐる宮垣をじろりと見やつて、

『社の風紀に對して、もう少し取締りを嚴重にするやうにとね、はゝゝ！』

斯う露骨に嘲笑されると、宮垣も流石に默つては居られなかつた。宮垣のやうな男には、又、さういふ男としての誇もあれば意地もあつた。彼の薄皮の頬には血が上つた。彼は自分の名刺を取出すと、ふるへる手先で龍彦の方へ差し出して、

『僕は斯ういふものです。僕は、大林とは親戚關係になつてゐる者です』

唯の社員ではないぞ！　といふつもりで宮垣は斯う云つた。

『社長の親戚でいらつしやるんですか。ははあ、社長の親戚なら、社の女事務員に手を出す權利があるとでもいふんですか？』

龍彦は何時の間にか、そこに椅子を引寄せて、どつかりと腰をおろしてゐた。彼は、その大きな威壓的な眼で正面に相手を睨みつけた。

『あなたは誤解していらッしやるのですよ。僕は唯、一寸――その――お話して見ただけなんです』

『妙な「お話」もあつたものですな。はゝゝ！』

と龍彦は笑つた。

『お互ひに紳士の體面は重んじ合はうぢやありませんか。あなたはどうしてそんなに僕を侮辱するんです』

『靜代さん』

と、龍彦は靜代の方に眼をやつて、

『かういふ危險な紳士とは、あまりお交際なさらない方が宜ささうですね。だが、あなたはどうして、職業婦人なんかにならなきやならなかつたのです？』

『いろ〳〵事情がありましたものですから——』

靜代は滅入るやうな調子で云つた。

『いつからです？』

『九月からでございます』

『然うですか？——どうも意外でしたな。あなたとこんなところで御眼にかからうとは實に思ひ掛けなかつたですな』

龍彦は、そこにゐる宮垣の存在には極端な無視を示して、こんな風に靜代に話しかけるのであつた。

ひツこみがつかなくなつた宮垣は、どうしていゝか判らぬ自分の立場を持餘しながら、むやみに紙卷をふかし續けてゐたが、やがて思ひ切つたやうに、ついと立ちあがつた。而して、

『僕は失敬します！』

と、かすれたやうに云ふと、ひよろ〳〵とした足どりで降り口の方へ出て行つた。

『はゝゝゝ、とう〳〵逃げて行きましたね』

龍彦は、大きな聲をあげて聞えよがしに笑つた。

『本當に、いゝところでお目にかゝりましたわ。私、どうしようかと思つて、本當に困つて居りましたの』

靜代は心から感謝した。あの房子を心の底から憎み切つてゐる靜代は、房子の夫なる龍彦にも好い感じは有つてゐなかつた。義理の兄とは云へ、專一は龍彦に對しては常に極端な侮蔑感を抱いて居て『彼奴は俗衆の典型だよ』などと云つてゐたので、さういふ夫の氣持への共鳴からも、

靜代は龍彦に對して好くない先入見をもつてゐたのだが、あの劇場で會つた時の印象は、十分にその先入見を裏書きするものであつた。何て可厭な人だらう、さう靜代は思つた。が、今日の、此の場合の龍彦は彼女にとつて實に救ひの神であつた。不意に飛び出して來て、あの無禮な誘惑者を痛快にやツつけて呉れた事が、靜代には實際涙が出る程嬉しかつた。

『あゝいふ奴が居るんで、油斷がならないのですよ。だが、どうして職業婦人などになられたのです。――專一君はどうしてゐるのです？』

『春頃からずつと身體を惡くして居りますものですから』

『さうですか？　專一君が病氣になつたので、それでつまり、あなたが斯うして外へ出て働かなければならなくなつた――つまり、さういふわけなんですね』

『はあ。然うなので御座います』

『病氣は酷く惡いんですか？』

『いゝえ。然うひどくわるいといふのでは御座いませんけれど、それでも未だ起きられませんものですから』

『病氣は何ですか？』

『――あの、胸の方が少し惡いやうで』

『ははあ。肺だね。遺傳ですよ。あの人の母親が矢張それで死んだのだ』

龍彦は陰影の無い調子で、ずかりと斯う云つた。その時、彼の口もとには一種の慘忍な微笑がちらと浮んで消えた。と同時に、靜代の、かぼそい襟脚のあたりに注がれた彼の眼には、食肉鳥のそれのやうな貪婪な輝きが鋭く閃めいた。――が、靜代はそんな事には少しも氣が附かなかつた。

『だが、そんな狀態でしたら、何とか僕の方へ話して呉れゝば宜かつたですな。親父はひどく怒つてゐる。親父と來たら、何しろ大へんな一酷者ですから、あゝまで怒らせて了ふと、もう一寸手が出せなくなる。しかし、親父は兎に角として、僕は專一君に對して、僕だけの責任――いや、僕としては別に責任も義務も無いわけだが、義理にもしろ、專一君は弟ですからね。僕は弟に對する情誼を心得ない男ぢやあ無いのです。せめて、僕へ迄でも何とか云つて來て呉れりや、あなたにこんな苦勞をさせなくても宜かつたのですがね』

龍彦は、優しくいたはるやうに云つた。

『ありがたう御座います。でも――』

『專一君も中々片意地ですからね。――兎に角こゝで會へたのは幸福です。これから一つお力になつてあげようぢやありませんか』

『ありがたう御座います』

と、靜代は感謝の意を籠めて、お辭儀をしたが、しかし、『どうぞ』とは、たやすく云ひ象ねる氣持だつた。

『僕の援助を受ける事を、專一君が望まないと云ふのならば、專一君には默つてゐればいゝぢやありませんか。女事務員などになつたところで、いくらにもならないでせう。この位の事は僕の方でどうにでもして上げますよ。會社務めなんぞ今日からでも止めておしまひなさい』

『御親切は本當にありがたう御座います。でも、そんなに迄して頂きませんでも、――』

『はゝゝ。何も遠慮なさる事はないのです。今ぢや妙な工合になつてゐるが、兎に角專一君は僕の弟です。とすりやあ、靜代さんはつまり僕の妹なんだ。その積りで一つ遠慮なく相談對手にして頂きたいですな』

龍彦の言葉はいかにも頼もしげだつた。他に頼る者も無く病人の夫を抱へて、醫藥は勿論、其の日の糧にさへ不自由勝な境遇に、獨り心細く苦み惱んでゐる靜代にとつて、こんな嬉しい言葉はなかつた。龍彦に對する今までの惡印象はすつかり消えて、靜代はそこに本當に一人の優しい兄を見出した樣な氣さへしたのであつた。靜代は感じ易く涙含みながら、もう一度、

『ありがたう御座います』

と、頭をさげた。

いつの間にかすつかり夜になつて、シヤンデリアの灯が、はなやかな光を二人の頭の上に注いでゐた。氣がついて見ると、此の特別室にも、もう一ぱいの客だつた。客達の中には、二人の樣子を、好奇的な眼眸でいろ〳〵と見てゐる者もあつた。

『とにかくこゝぢやあ――』

と、龍彦はあたりを見廻すやうにして、

『何處か別のところへ行つて、ゆつくり相談しようぢやありませんか?』

『でも、私もう歸らなければ――』

靜代は、急に、斯うしてはゐられぬといふ樣子で立ちあがりかけた。

見　舞

靜代が、カツフエ・ドオトンヌの二階で、龍彥と話してゐる丁度同じ刻限だつた。一臺の自動車が、飯田橋の電車停留場から、一二町濠端に添うて大曲りの方へ折れたところの、とある横町の入口で停められた。瀝青色の濠の面は、いく條かの黃いろい灯影をうつして、その上にはうつすりと靄が下りてゐた。早稻田行の電車が、靑い火華をポオルに散らして過ぎたあと、水に近い片側町は、相當の人通りはありながら、何となく冬ざれの淋しさを見せてゐた。自動車が停められると、運轉手臺から飛び降りた運轉手は、その横町の角の煙草屋の店先で、二言三言何か聞いてから、

『わかりました。此の横町をはひつて二つ目の露地を右へはひれば、三軒目の家ださうです』

と車中の人に報告した。

『さう？　わかつたの？』

車中の聲はひそやかだつた。

『二つ目の露地――三軒目？』

斯うあらむ返しに繰返したもう一人の聲は男の聲だつた。車中には、黑い毛皮の襟卷で頰の半ばを埋めた美しい婦人と、土耳古帽を被つた山羊髯の男とが向ひ合つて乘つてゐたのだが、山羊髯の男は、脊をかがめて顏を扉の外へ、片脚を踏臺に踏み出しながら、

『自動車はこれッきり行かないのかい？』

と運轉手に訊いた。

『へえ。何しろ此の通り狹いんで――』

運轉手は云つた。

『すぐなんだね？』

『えゝ。すぐださうです』

『奧さん』と、山羊髯の三好明は、黑い襟卷の婦人――すなはち、房子の方を見返つて、

『どうもをかしいですな。――こゝまで來て、どうしてあなた御自身で見舞つてやらないのです？』

『私がたづねられるくらゐなら、あなたに賴みはしませんよ』

『どうして奥さんが訪ねる事が出來ないんです？』

『先刻お話した通りよ。あの人は私を憤つてゐるのです』

『どうして憤つてゐるのです？』

『理由があるのよ』

『どんな理由があるにしろ、奥さんのやうな人に對して憤つたりなど出來る男は、此の世の中には無い筈ですよ』

『でも憤つてゐるんだから仕方が無い。――そんな事は、だけど、どうでもいゝのよ。御病氣がどんな樣子だか、それを見て來て吳れゝばいゝのよ。而してね、私からと云つちやあ受けてくれないかも知れないから、唯、ある女から――まあ、隱れた同情者――いゝえ、崇拜者――からとでもいふ事にしてね。どうぞ、そこのところをうまくやつて下さいな』

『うまくやるもやらないも無いですよ。彼の男がどんなひねくれ者にしろ、屹度よろこぶです』

『然うぢや無いの。あの人は何も彼も誤解してゐるんですから――それにね、あの人の奥さんは、私を敵のやうに憎んでゐるんですからね。だから、私の名なんか決して口に出しちやあいけないのよ』

『どうもをかしいですなあ。僕には何が何だか、さツぱりわけがわからんです』

『わからなくてもいゝのよ。――あなたはね、唯、私の賴む事をその通りにして吳れさへすればいゝの』

房子は苛立たしげに云つた。

『それはもう、女王樣の仰せ附けとあれば、此の奴隷奴は、どんな事でもいたしまするが――』

と、三好は又例の、おどけた調子になつたが、

『何を愚圖々々してゐるのよ！』

と、激しくきめつけられると、自動車から轉がりおちるやうにして、その横町をはひつて行つた。

三好を遣つたあと、房子はじつと自動車の中に坐つてゐた。淡い灯影に照らし出された彼女の顔は、殆ど無表情に青ざめ凍つてゐた。しかし、彼女の胸には、さま〳〵の情緒が、いくつもの頭のある蛇のやうに、からまり合ひ、縺れ合ひ、又、嚙み合つてゐるのであつた。

房子は、激しい絶望から、その打撃に對する反抗的な衝動から、同時にまた一種捨鉢な意地張から、些とも愛してゐない、愛してゐないどころか寧ろ厭ひ惡んでゐさへした龍彦と結婚したのであつたが、しかし此の創の痛みを烙鐵の爛れで紛らさうとするやうな非常手段も、結局何の效果も無かつた。房子はどうしても專一を忘れる事が出來なかつた。專一に對する戀を捨てる事が出來なかつた。妖婦！　どうしてもさうより外思つて呉れないなら、よし！　妖婦になつてやらう。而して、此のみじめにふみにじられた愛を、呪ひの坩堝にたぎらして、それと同量の憎みにまで鑄直してやらう！　この覺悟で彼女は龍彦と結婚したのであつた。だが、果してそれが出來たであらうか？　もし、それが出來たなら、專一が病氣と聞いて、こんなに憂慮を感じる筈は無いのだ。むしろ、專一のさうした不幸をいゝ氣味としてよろこんでもいゝ筈なのだ。いや、實際、そんな氣がしないでも無かつた。が、どんな努力を以てしても遂に消す事の出來ない彼女の胸の

純愛は、彼女の心を、そんな小さな反抗的の感情に住まらせては置かなかつた。病氣――おゝ、あの人が病氣！　彼女は、その枕許に馳けつけて、手づから熱をはかり、手づから藥をすゝめ度いと思ふのである。しかも、この心を何人が知らう！　房子は、自動車の中でひとり思ひ悶えるのであつた。

さうして十分が經ち、二十分が經つた。三十分近く經つたが三好は未だ戻つて來なかつた。運轉手臺に、外套の襟を立てゝ蹲るやうにしてゐた運轉手は、バットの吸殼を投げ捨てながら、

『なか〳〵お寒うございますな』

と、あくびまじりに云つた。――辻で拾つた自動車だつた。運轉手は、その不思議な客をひそかにいぶかつて居るらしかつた。

『お待遠さまですわね、私、一寸行つて見て來ますわ』

房子は思ひ切つたやうに、坐褥から身を起した。

妖婦の嘆き

時々どつと吹きつけて來る風が、がたびしと戸障子をきしめかして過ぎた。その度毎に、電燈が微かに搖れて、壁に重なり合つたる主客二人の影法師も、それと共に搖れた。主の專一は寢床の上に起きあがり、肩をそびやかして坐つてゐた。彼は病熱にうるむ眼を鋭くきらめかして、昂奮した調子で云つた。

『それは勿論、感謝するよ。好意は實にありがたいのだ。けれども、唯「ある人」からとだけぢや、受け度くても受けられ無いぢやあ無いか？　その人の名を云つて聞かしてくれたまへ』

『いや、名は是非云はんで呉れと、呉れ〳〵も賴まれてゐるんだ』

三好は、細い眼をぱち〳〵と瞬きながら、當惑さうに繰返した。

專一は、前に置かれた一封の金包みに眼を落して、しばらくじつと考へ込んでゐた。三好が突然やつて來て、ある人に賴まれて見舞に來たのだといふ。――見舞はありがたいが「或る人」とは一體何者なのか？　專一は最初、それを榛澤の父かとも思つて見た。が、父ならば、三好など

を使によこすわけは無い。龍彦か？　龍彦にそんな好意があらうか？　よし龍彦にそれだけの好意があつたにせよ、龍彦ならば名を秘したりなどし無いで、寧ろ正面から堂々と恩を賣るの態度に出るであらう。父でもない、龍彦でも無いとするならば、一體何人なのか？

『兎に角、名を云つて貰はなくちや、折角だが受けられない。どうぞ、君に賴んだ人にさう云つて呉れ給へ』

『困るな。どうも、君は相變らず頑固だな』

三好は、山羊髯を指先で捻つた。

『頑固なのぢや無い、感謝するにも感謝の對象がわから無いやうな、そんなうやむやの好意は、斷じて受けられないといふんだ。どうぞ、これはそのまゝもつて歸つて呉れ給へ！』

『まあ、さう云はんで――』

三好は慌てゝ、

『折角の心づくしなんだ。その人は本當に君の病氣を心配してゐるんだ。君の病氣がどんな風か、よく僕に見て來て呉れと云ふんだ』

『病氣なんか何でも無いよ。もういゝんだ』
『いや、案外元氣なんで、僕も安心したよ。その人も屹度よろこぶだらうよ』
『何人なんだ「その人」つて云ふのは――』
『君自身には心當りはないのかい？』
『無いね。――だが、一體どんな人なのだ？』
專一はもう苛立たしくてたまらぬといふ風に、かう繰返した。
『美しい人なんだ』
『美しい人？』
專一は、とむねを衝かれたやうに問ひ返した。
『うん』
『ぢや、女なのか？』
『もちろん女だよ。――いや、あの人は、僕思ふに、君に對して或は好意以上のものを有つてゐるね。君は實に羨む可き艷福家だぜ』

『何人なんだ？』
專一は更に問ひ迫つた。
『わからないかい？』
『わからない』
『ぢや云つてしまはう！　決して云ふなと云はれたんだがね。――實はね、榛澤家の若夫人なんだ。房子さんなんだ』
『房子！』
專一は反射的に繰返した。彼の顏からは一時に血が退いた。すべての表情が假面のやうに凝固した。が、やがて、
『はゝゝ！』
と、專一は顏を引歪めて、聲の無い笑ひを笑つた。
『何だつて又、あの女がこんな眞似をするんだ。こんなもの、叩き返してくれ給へ』
專一は手をのばして、その金包みをとりあげると、三好の膝の前に投げつけた。而してそのま

ま、どろりと寢床の上に横はると、

『妖婦！』

とうめくやうに云つた。

『どうしてなんだ。どうして房子さんの好意が受けられないのだ』

三好は呆氣にとられて云つた。

『好意だと？』

專一は憎々しげにその眼をきらめかして、

『あいつはおれを嬲つてゐるんだ。畜生！』

『そんな馬鹿な！　どうして君はそんなにひがむんだ？』

『君の知つた事ぢや無いのだ』

『誤解してゐる――さう、あの人も云つてゐた。たしかに、君はあの人を誤解してゐるんだよ』

三好は、それが癖の、忙しく瞬きをしながら云つた。

『何が誤解だ。僕は些とも誤解などしちやゐない。僕は唯外の男のやうに、あの妖婦のトリツク

に引ッかゝらないだけなんだ』

『いや、あの人は本當に君の事を心配してゐるのだよ』

『そんな事があるもんか？』

『だからこそ、斯うして僕を使にして見舞を――』

『そんな見舞なんぞ、餘計なお世話と云ふものだ。これが何が見舞なものか。あいつは僕を嬲つてゐるんだ。彼奴の、あくどい調戯なんだ』

『いや、決して然うぢやあ無い。あの人はそんな人ぢやあ無いよ。それは成程、あの人は幾分傲慢でもあれば我儘でもあるがね、併し、あれほどの傑れた女には、あの位の傲慢や我儘は許されてもいゝ筈だよ。そしてまた、たしかにいくらか媚婦でもあるだらう、それは僕も認めるよ。しかし、君の云ふやうに、あの人は決して妖婦なんかぢや無いよ。僕はあの人がどんな女かつて事を知つてゐるのだよ』

三好は、大きな鼻の、鼻の頭が少し赤くなるほど昂奮して一生懸命に辯護した。

『君が何を知つてゐるものか？』

専一は冷笑した。

『いや、知つてゐるよ。あの人の事を一番よく知つてゐるのは僕だよ』

『どうして、そんな事が云へるんだ』

『愛する者のみがよく知る事が出來るのだ』

三好は山羊髭を捻りながら、一寸哲學者めいた重々しい口調になつた。

『ぢや、君はあの女を愛してゐるといふのか？』

『うん。僕はあの人を愛してゐる。むしろ崇拜してゐる！』

『かはいさうに――』

『何が可哀さうなのだ？』

『だから、妖婦だといふのだ。貪婪飽く無しといふやつだね、それが妖婦の本色なのだ。君のやうな男をまで――』

『君のやうな男――とは、少し失敬ぢや無いかな』

三好は流石に怫然とした。

『兎に角、その女に云つて呉れ給へ。ふざけた眞似をするな！　とさう云つて呉れ給へ。僕たち夫婦二人、舌をかみ切つて死ねばッてそんな奴の見舞や援けは受けられないとさう云つて呉れ給へ』

専一は、鋭く斯う云ひ放つと、それなり眼を閉ぢてしまつた。

専一の激しい言葉は、その時、そつと玄關先に佇んでゐた房子の耳にもはつきりと聞きとられた。狹い家の、殊にその部屋は玄關のすぐ脇に窓を有つてゐたので、雨戸は閉ぢられてゐたが內部の會話は筒抜だつた。專一と三好との、彼一語、此一語の應酬を、一々聞きすましながら、房子は、憤りと恨みと悲みとの、次々に湧きかへるあらしのやうな感情から辛うじてその身を支へて立つてゐたが、その最も激しい言葉を耳にすると、彈かれたやうに玄關先を離れた。

三好が、器量惡く追ひ返されて、自動車へ戻つて來た時は、房子は、あれからずッとさうしてゐたといふやうに、端然として車上に坐つてゐた。黑い毛の襟卷に顎をうづめた顏は、物凄いまでに青ざめてゐた。

『やあ、どうも――』

と、自動車にはひつて來るなり、三好は頓狂に叫んだ。

『實に呆れた男だ！　怪しからん男だ！　あんな奴鬼に喰はれてしまへだ！』

だが、房子はそれには答へなかつた。

『あんな奴は、奥さん、もう構つてやらん方がいゝですよ。實に始末におへないひねくれ者です』

『……』

『房子さん　あの男は、あなたを誤解してゐるのです』

『私を？――私の名を云はないやうにつて云つておいたぢやありませんか？』

房子は冷然として云つた。

『いゝえ。それは――それは云やあしませんがね』

と、三好は苦しく云ひ澁つて、

『兎に角、あんな奴はもう構つてやらない方がいゝんです。――いや、大へんお待たせしましたね。おい、君！』

三好は運轉手に、自動車を返すやうに命じた。

自動車が走り出してからも、房子は何も云はなかつた。三好は、房子の御機嫌を損ねたのだと思つて、すつかり恐縮しながらも、

『奥さん！　房子さん――』

と、おど〳〵と呼び掛けた。が、その時、房子の眼に一ぱい涙がたまり、青ざめた頰にも一筋それが光つてゐるのを認めると、三好は、思はず　おや！』と、心の中で呟いた。

二人の乘つた自動車は、飯田橋の際で、向ふから走つて來る一臺の自動車とすれ違つた。

二つの好意

その自動車の中には、龍彦と靜代とが乘つてゐた。

自動車が、今まで、房子の自動車が停められてゐた濠側の道へ曲ると、並んで掛けた龍彦と、出來るだけ多くの間隔を置くやうに、隅の方に小さく坐つてゐた靜代は、

『あの、もう此の邊でよろしいのでございます』

と云つた。

『さうですか？　ぢやあ――』

龍彦は運轉手に車を停めさせて、

『僕も一寸樣子見にお寄りし度いのだが、專一君はおそらく歡迎しては呉れないでせうからね。は丶丶』

『そんな事もございますまいけど――もう、こゝで結構で御座います。本當に今日は種々御厄介になりました』

靜代は、丁寧に禮を云つた。

『本當にお目にかゝれて宜かつたですな。いろ〳〵僕も考へておきますから、ぢや、明日また――。病人の工合次第で、轉地させた方がいゝやうだつたら、是非さうするのですな。費用の方は僕に任せて下さりや何も御心配ありません。もちろん、專一君には內證にですな。は丶丶』

『い丶え。そんなにまでして頂きませんでも。たゞ、あの會社の方は工合が惡う御座いますから、外に何處か私の勤め口をお世話して頂けば、それでもう十分なので御座います』

『どうしてもさういふ御希望なら、それはいくらでも御世話はしますがね。兎に角、僕がついてゐるのだと思つて、心强く思つて下さい。――ところで、と――』

龍彦は車から降りようとする靜代を引留めるやうにして、衣囊から財布を出すと、中から幾枚かの紙幣を出して、

『生憎、今日は持合せが少ないんだが、是だけでも何かの役には立つでせう。持つていらッしやい』

『い丶え。どうぞ、そんな御心配は――』

靜代は赤くなつて拒んだ。

『使ひ殘りの小遣錢ですよ。遠慮なさる程の物ぢやあ無いのです。さあ、取つておいて下さい』

『でも』

靜代は當惑してしまつたが、その時ふと靜代は、月末の難關がすぐ眼の前に控へてゐる事を考へた。今はもう質屋へもつて行く一枚の着物さへ無かつた。

『さあ、どうぞ取つて置いて下さい』

龍彦は、再び促した。

『ぢや、本當にすみませんけど、拜借しておきますわ』

『遠慮しちやいかんですよ』

靜代がそれを受取ると、龍彦は滿足さうに微笑した。

龍彦に別れて自動車を降りた靜代は、歸りの時間が今日は一時間以上もおくれてしまつた事を考へ、病人の夫が、どんなに待ち苛立つてゐるかと思つてもう氣が氣では無かつた。病氣のせゐか、專一は此頃ひどく神經過敏になり、疑ひッぽく怒りッぽくなつてゐる。歸りの時間が十分遲れても、何かあつたのでは無いかと、いろ〳〵と氣を廻すのである。それも皆、それ程自分を愛して呉れる故とは思ひながら、時には恨めしくなる事が無いではなかつた。今夜はこんなにおくれてしまつた。遲れてしまつた理由を云へばいゝのだが、しかし、龍彦に會つて斯々などと話したら、專一は屹度眞赤になつて怒るに違ひ無い。專一は、あんなに龍彦をさげすみ、嫌ひ厭つてゐるのだから——

靜代は、とつおいつ、思ひ佗びながら、その横町を曲つて行つた。

だが、その時、病床の上に仰臥して、ぢつと眼を閉ぢてゐる專一の心は、靜代の歸りの遲さを思ふ餘裕もなく、それとは別の想念におもひ亂れてゐた。

專一は妖婦と罵つて、房子からの見舞をつき返した。嬲つてゐるのだ、いたづらだ。實際さうより外は思へなかつたからだ。——だが、果して、そんな風に撥ねつけてしまつて宜かつたのだらうか？

あの人は本當に君の事を心配してゐるのだ——さう云つた三好の言葉が、いつまでも專一の耳に殘つてゐた。

『あの女が自分を愛してゐるといふのは——？ いや、いや！ と、專一は强く頭を振つた。『馬鹿な！ あれがあの女の手なんだ、馬鹿な！ 何を今更——』

專一は、しかし、何か片のつかない、妙に重苦しくこだはるものをその心に感じずにはゐられなかつた。

おもての方で足音がした。格子戸が引きあけられた。それを耳にして、專一ははじめて靜代が歸つて來た事に氣が附いた。

『唯今』

靜代は、いつものやうに、枕もとへ來てべたりと坐つて、

『御免なさいね。今日はこんなにおそくなつてしまつて――』

靜代は專一の顏を見るなり斯う云つてわびた。

『あゝ。――ずゐ分遲かつたね』

『今日はね。女學校時代のお友達に會つたのよ。それで氣が氣ぢや無かつたけれど、つい引きとめられてしまつて本當に御免なさいね』

『お友達？』

『えゝ、そのお友達が種々と心配して呉れたのよ』

靜代は、咄嗟のおもひ附で、そんな拵へ事を云つてしまつた。

『さうか？　だが、ずゐ分おそかつたね』

しかし、專一はさう强く詰るといふ風でも無かつた。それが靜代には不思議だつた。――靜代は一寸あたりを見廻してから、客があつたらしい事を直覺した。

『どなたか見えたの？』

『あゝ』

『どなた？』

『三好が來たんだ。――靜代さんは未だ知らなかつたかも知れないな。僕の昔の繪の仲間なんだ』

專一は、唯それだけ云つた。三好が何の爲めに來たのかは云はなかつた。

『さう？』

と、靜代は何か腑に落ちないといふ顏附でもう一度專一の顏を見た。

陰影のある會話

『――僕がどうしようと、何處に行かうと、それは僕の勝手だ。それに就いて、君から兎や角云はれる理由は無い筈だ』

龍彦は吐き出すやうに云つた。

『勿論、兎や角申上げるつもりは御座いませんの。たゞ、何方へお出でになつたのか、一寸それ

をお伺ひ申上げて見たまでで御座います』

房子は、冷然として云つた。彼女の彫像か何かのやうに無表情な顔には、唇のあたりに微かな嘲笑が漂うてゐた。

『そんな質問に答へる必要は無いんだ』

龍彦は叩き附けるやうに云つた。

『左様でございますか。ぢや、おうかゞひ致しません』

房子は、すつと安樂椅子から立ちあがつた。而して、

『では、おやすみ遊ばせ』

と、あくまで、取澄ました調子で云ひ殘して、部屋から出て行かうとした。

『お待ちなさい』

『何か御用で御座いますか?』

房子は外々しい眼で見返した。

『お掛け!』

『お話ならば、明日の朝にして頂き度う御座います。私、少し氣分が惡う御座いますから』

『お掛けと云つたらお掛けなさい』

龍彦は激しく怒鳴りつけた。――房子は、一寸、肩を聳かすやうにしたが、それでも素直に、再び安樂椅子に腰を掛けて、何のお話かさあ伺ひませうといふ眼眸でぢつと夫の顔を見上げた。

『房子さん。――君は一體、僕を何う思つてゐるのです?』

怒りを鎭めた聲で龍彦は云つた。

『どう思ふツて――』

『君は、僕を、君の何だと思ふんです?』

『それは――あなたは私の夫でいらッしやる。さう思つて居ますわ』

『本當に然う思つてゐるんかね?』

『だつて、事實が然うなのぢや御座いませんか? 殊更、思ふも思はないも無いぢやあ御座いませんか?』

『本當に夫だと思ふんなら、何故、もうすこし妻らしくして呉れないんです?』

『私、そんなに妻らしくないでせうか？』

房子は、例の嘲笑を含んだ顔附で、白々しく斯う云つた。――それが、龍彦を一層苛立たせた。

『僕は君程冷淡な女を見た事がない。君には、妻が夫に對して有つ可き愛とか情熱といふものが些とも無い。君はまるで石のやうに冷たい女なのだ』

『さうでせうか？　私、そんなに冷淡にしたり冷たくしたりするつもりは些とも無いのですけど――私、これで、ずゐ分忠實な妻だと思つてゐるのですけれど――』

『なるほど、妻としての義務には忠實で無い事はないかも知れん。だが、僕あ、そんな義務などを君に求めてゐやあしないんだ』

『では、どうすれば宜しいので御座います』

『それを聞く奴があるか』

龍彦は嚙み附くやうに云つたが、調子を變へて、

『房子さん。なるほど、僕も悪いかも知れん。僕が此頃内を外に遊び廻つてゐる事も事實だ。だ

がね、僕は決してそれが樂しくつてしてゐるのぢやあ無いのだ。僕はつまり家庭で滿たされざるものを然ういふ巷で求めてゐるのだ。――僕は君と結婚したら、つまらない遊びなどはふつつりと止めて、新しい生涯にはひるつもりでゐたのだ。僕が、又、こんな遊びなどを初めたのは、みんな、君があまり冷たいからだよ。冷淡だからだよ』

『あなたが、どんなにお遊びにならうとそれはあなたの御勝手で御座いますわ。男の方は、どんなもなさる事なんでせう。私、そのくらゐの事に嫉妬を燒いたりする程開けない女では無いつもりで御座います』

房子の口もとには相變らず嘲りの微笑が漂つてゐた。

『そ、それが僕を苦めるのだ』

と、龍彦はせッかちに云つた。

『それが、つまり君の冷い女である事の證據なのだ。假にも君が、少しでも妻らしい氣持で僕に對してゐるんなら、少しは嫉妬ぐらゐ感じなけりやならない筈だ』

『まあ、ぢや、私に嫉妬しろと仰有るの？　相手はたゞかが賣物買物の取るに足りないつまらない

女達ぢやありませんか？　そんな者相手に嫉妬するなんて、まあ何て馬鹿らしい！』

房子は、さう云つて、

『ほゝゝゝ！』

と聲をあげて笑つた。

『あゝいふ種類の女達だつて、君が輕蔑する程つまらんものぢや無いよ』

『それなら結構ですわ。澤山御愉快をなさいませ』

『何も僕だつて、商賣女ばかり相手にしてゐるわけでも無いさ』

龍彦は、ふてくされ氣味にこんな事を云ひ出した。

『存じて居りますわ。――だから、先刻おうかゞひ致しましたのよ』

と、房子は今までの素氣の無い調子に引換へて、何か斯う、ぐッと相手の心に突込んでゆくやうな言葉附で云つた。而して、じつと龍彦の顏をのぞき込んだ眼には、妙に熱ばんだ、不思議に複雜な表情さへ動いてゐた。――龍彦は狼狽した。では、今日靜代に會つて、靜代を彼女の家の近くまで送つて行つた事を此の女は知つて居るのであらうか？

『お隱しなさらないでもよろしう御座いますわ。――でも、些と惡あがきが過ぎるやうで御座いますことね』

『何を云つてゐるのだ？』

『あの方を相手だつたら、私、嫉妬せずにはゐられないので御座います。もし、私を嫉妬させようと御思ひになるなら――』

房子はあとの言葉を、その眼で補つた。

『何を云つてゐるのかさッぱり判らんね』

龍彦は思ひ切り惡く空とぼけた。

『私、妙な性分でございますの。競爭者が無いと、愛する氣持になれませんの。あの方なら、私、相手にとつて不足はございませんわ』

『わからないね。君は誤解してゐるのだ』

『いゝえ。誤解などして居りません。私、あなたが、あの方を愛していらッしやる事をもう疾うから知つてゐるので御座います』

『どうしてだ？』

『あなたが、あの方にお會ひになつた時、あの方を見たあなたの眼――その眼で、私はそれを知りました。それから、あの都築さんの繪、あの方をモデルにして描かれたあの繪をあなたは、どんな眼附で御覽になつたでせう？』

『それで、ぢやあ、あの繪を裂いて了つたのか？』

初めて腑に落ちたといふやうに、龍彦は云つた。

房子は苦笑した。そして、さげすむやうに、

『でも、あなたには多分駄目』

『何が駄目だ』

『あなたにはむづかしいわ。あなたには矢張、商賣女が丁度いいので御座いませう。ほゝゝ』

『馬鹿にするな』

『でも、多分駄目ですわ。もし、駄目で無かつたら――』

『駄目で無かつたら？』

龍彦は我知らず相手の言葉につりこまれた。もう、いつまでも空とぼけてばかりはゐられなかつた。

『いゝえ、駄目！　あの人はあんなに都築さんを愛してゐるんですもの』

『專一か？――あいつはもう死にかけてゐるんだ』

龍彦は慘酷に云つて退けて、

『何有、あんな女？　すぐにだつて手に入れて見せるさ』

『さうしたら、私、嫉妬の爲めに死んで了ふかも知れません。でも、そんなにうまく行きますか知ら？　ほゝゝ、まあ、せいぜいお手並を拜見して居りますわ』

房子は微笑した。――何といふ奇怪な會話！　しかも、輕い微笑を以てそれを續けてゐる房子の心には、底深い一つのたくらみが何時の間にか出來あがりつゝあるのであつた。

あの人は遂に自分の眞實を信じて呉れなかつた。そして、自分の、生涯の唯一つの愛を、あのやうに慘酷にふみにじつた。妖婦！　見るもけがらはしい！　それが、あの人の自分への挨拶だつた。妖婦と云ふのならば、よし！　妖婦になつてやらう！　愛を憎みに――愛を、それと同量の

憎みにまで！　再び惡魔をその心に呼んで此の覺悟を堅め直した房子であつた。そして、專一を苦めてやる爲めには、專一から、彼の最も愛する者を奪ふより外はない。靜代を奪ふこと――これに增して彼を苦しめこれに增して彼への復讐を效果的ならしむるものがあらうか？　斯う考へた房子は、龍彥の靜代に對する慾望をその爲めに利用しようといふたくらみをその胸に描きはじめたのであつた。龍彥が、好色的な興味を靜代にもつてゐるらしいことには、敏感な房子は前から既に氣がついてゐたのであるが、今夜、自動車に同乘してゐる二人の姿をちらと見て、房子は二人の間に何等かの交涉がはじまつてゐる事を見てとつたのであつた。――かうして、房子の筋書は書かれた。あとは、龍彥を傀儡として動かしさへすればいゝ。いや、動かすまでもなく、彼は彼自身どん〳〵と、その筋書を運んでゆくに違ひ無い。――自分はただ、ぢつと此の舞臺を眺めながら、次第に演出されゆく筋書に、復讐の快感を味ふ事が出來る筈だ。――房子は斯う思つて、ひとり秘かに會心の微笑をもらした。それは、彼女の衷に來り宿つた惡魔の靑白い物凄い微笑だつた。

『ふ、ふう！』

と、房子が出て去つたあとの部屋で、安樂椅子にふんぞりかへつた龍彥は、葉卷の烟を荒く吐きながら、獨言つた。

『房子の奴、おれを馬鹿にしてゐる。よし、それならば見てゐるがいゝ！　おれは必ずあの女を手に入れて見せる。あの女に對してなら嫉妬する――はゝゝ！　嫉妬すると白狀して居たが、それは本當に違ひ無い。あの繪を切り裂いたりした氣ちがひ染みた行爲がそれで判る。房子の奴も案外正直者だな。而して、案外かあいゝところがあるぞ。あの女を手に入れて、見て居れ！眞黑に燒かして見せるから、ふ、ふう！』

龍彥は、にやりと笑つた。――彼の眼には、あのたより無げにふるへてゐる靜代の瞳が映つた。貧しさの中に病める夫を抱へて、途方にくれてゐる靜代の姿が映つた。それは、彼の爲めに最も食慾を唆るところの、甘美な餌食でなければならなかつた。彼は、獨言ちつゞけた。

『いや、あの女はなか〳〵好い。房子などとは又別の美しさだな。可憐美とでもいふのかも知れん。あゝいふのも惡くは無いて。いや、どうしてとても素敵だ。房子の奴が嫉妬するのも無理は無いて。はゝゝ』

隱れた保護者

『轉地？』

と、專一は問ひ返した。

『えゝ。鎌倉の方か、でなければ房州の方へでも、海岸の暖かいところがいゝわ。そこで半年も靜養すれば、ぐッとよくなりますわ』

『それは結構だがね。しかし、そんな事が出來る狀態ぢやあ無いからな』

『ところが出來るのよ』

靜代はほゝゑみながら云つた。

『どうして？』

『お金を出して下さる人があるの』

『金を出して呉れる？』

『えゝ、毎月私たちのために、いくらか宛出して下さる人がありますの。——私だつて、もう會

社なんかへ出無くてもいゝのよ』

『だが、それは一體何人なのだ？』

『私の、亡くなつたお父様のお知合の方なんですの。——今日その方にお目にかゝつたの』

『その人が、ぢやあ、僕等の保護者になつて呉れるといふんだね。何といふ人なんです？』

『山岸さんて方ですの』

靜代は出鱈目の名を云つた。

『それは何ういふ人なんです？』

『お父様のお友達で、それはお金持の方なの。私がいろ〳〵事情をお話すると、それは困るだらう？　そんな事をしてゐて病人を惡くしてはいけないから、早速轉地させて上げるがいゝ。お金は出してやるから——と、然う仰有るの』

『ふん、深切な人もあるもんだな』

專一は、併し疑ひを含んだ眼で靜代の顏を見やつた。

『えゝ、それは深切な人なの。でも、お父様とはずゐ分仲好くしていらしッたから、そのくらゐ

の事をして下さつてもいゝのよ』

『今、何をしてゐる人なんです？』

『商人よ』

『商人にだつて種々あるが――』

『矢張、會社か何かやつてゐるんでせう。大へんなお金持ですから、そのくらゐの事を私達にして下すつても何でも無いのよ』

『で、その人に、今日會つたんだね。何處で會つたの？』

『歸りに――電車の中で――』

『山岸――何といふ名？』

『山岸――幸藏つていふの』

『そんな友達が、あなたのお父様にあつたのかね？』

專一はどうも腑に落ち無かつた。突然、そんな深切な保護者が自分達の前に現はれて來たといふ事が、どうも信じられ無い氣がした。

『だが、電車の中で一寸話したぐらゐぢや、あまりあてにならないね』

『いゝえ。そんなあやふやな話では無いの』

『どうも、をかしいな』

專一は獨語めく調子で云つた。――夫が、疑つてゐるらしいのを見ると、靜代はと胸を突かれた。何故、眞實の事を話さなかつたかと悔いられもした。が、今になつてから、實は斯々などと訂正すれば餘計にへんになる。いや、もし、專一が、その好意の提出者が龍彦であると知つたなら、一言の下に拒絶するであらう事は火を睹るより明かだつた。あんなにまで、卑しみ、厭ひ、或は憎んでさへゐる龍彦の好意は寧ろ激しい怒りを招くに過ぎなからう。と云つて、斯のまゝで居れば、病氣は惡くなるばかりである。それに、あんな事があつてから今の會社にもう勤めにくゝなつてゐる。會社をやめれば、その日の糧にさへ窮しなければならない。此際は、どうしても眼をつぶつて龍彦の援助に縋る外は無い。長い事では無い。せい〳〵半年――せめて此冬を越す間だけでいゝのだ。うそも方便といふ。此のいつはりだけは、神様もお許し下さるだらうと、靜代は苦しい胸に思ふのであつた。

『ねえ。あなたのお心持からは、そんな見ず見らずの人の好意を受けたりするのは定めしおいやでせうけれど、ねえ、僅かの間なんですから、眼をつぶつて忍んで下さいな。半年の間、暖かい空氣のいゝ海岸でしづかに養生すれば屹度よくおなりになるわ。お醫者さんもさう云つていらッしやるんですもの。而して又、繪がお描けになるやうに――ねえ、半年靜養なされば屹度、又、繪がお描けになるやうになるわ』

『あゝ、描き度いなあ！』

と、專一は熱い溜息と一緒に云つた。

『僕だつて、斯うして寢てゐるのは、實に殘念なんだ。早く健康をとり返して、思ふ存分描いて見度いんだ。ねえ、靜代さんあなたをモデルにして僕は素晴らしい繪を――不朽の傑作を描いて見せるよ』

『えゝ、どうぞ――ねえ、それには矢張轉地して十分養生をなさらなければいけないわ。あなたのお仕事の爲めに』

『さうだ。仕事の爲めに――』

『さうして、私の爲めにもですわ』

靜代は笑ひながら云つた。

『仕事の爲めによりも、先づ靜代さんの爲めに――。本當に靜代さん、君にもひどい苦勞をさせるねえ』

『苦勞なんて何でも無いわ。でも、然う思つて下さるなら、どうぞその方の好意を容れて上げて下さいな。さうすれば、私も當分あの可厭な會社なんかに出なくても濟むんですもの』

『さうだねえ。だけれど、その山岸さん――たしか山岸さんと云つたね。その人の話は確實なのだらうかね』

『あなたさへ承知して下されば――勿論、それは確實な話なんですわ』

專一が、愈々、小田原の海岸に轉地する事になつたのは、十一月ももう末になつてからであつた。町からは少し離れた松林の中の小さな貸別莊が借りられた。專一は、その爽かな海氣と豐かな日光とに惠まれた海岸の家で、靜かに病を養ふ身となつた。

轉地の効果は著るしかつた。そこへ來てから二三週間經つと專一は床を離れて、近まはりの散歩ぐらゐは出來るやうになつた。何よりうれしいのは、靜代が終日傍にあつて、最善の看護をして呉れる事であつた。もう、靜代が働かないでも、生活の方の心配は要らなかつた。專一は、その山岸といふ援助者に對して心からの感謝をさゝげざるを得なかつた。

『僕は、少し勿體無い氣がするよ。お互ひに何だか幸福過ぎるやうぢやあ無いか？』

專一は、屢〻、そのパトロンの事を云ひ出した。

『えゝ、本當に深切な方ですわ』

靜代もさういふのであるが、その時、さッと暗い翳が靜代の眉を掠めたことには、專一は氣がつかなかつた。

『斯うして世話になりながら、知らん顏をして黙つてゐるわけにやあ行かないからね。もう少しよくなつたら、僕は出かけて行つてお禮を云ふよ。靜代さん、伴れて行つて呉れ給へ』

『えゝ、でも、そんな事を氣になさらないでもいゝと思ふわ。何しろ、大へん忙がしい人なんですから——それにあんなお金持なんですもの、私達へ下さるぐらゐの事、まるで問題になんかし

ていらッしやらないんでせう』

『はゝゝ、それはさうだらうよ。そんな大ブルジョアの生活から見りや百や二百の金は、小使錢の何分の一、いや、何十分の一にも當らないのだからね。しかし、恩惠として受ける身になつて見れば、だから、構はんといふつもりにもなれないよ。たとへ、その人にとつてどんなに僅かなものにしろ、何しろ、僕にすれば、まるで見ず知らずの人なんだからね。でも、榛澤の親父なんかに貰ふよりどれほど氣持がいゝかわからないよ』

『さうですとも』

と云つたが、靜代の答へはひどく重かつた。

『榛澤と云へばね、今まで靜代さんには云はずにゐたがね。あの女——房子がね、僕のところに見舞をよこした事があるんだよ』

その時、專一は日當りの緣の籐椅子の、白い毛布に身を横たへてゐたが、のみかけの牛乳を、云ひさして一口呑んで、

『此方へ來る少し前さ。靜代さんのゐない留守だつたよ』

『房子さんが？』

と、靜代ははッとおどろいたやうに、

『あの人が見舞に？』

『あの女が自分で來たんぢやあ無いんだ。あの三好、たしか靜代さんも知つてゐた筈だね。あの道化者の三好が使になつて、金なんか持つて來やがつた事がある』

『まあ！　それであなたどうなさいました？』

『勿論、突返してやつたさ』

『さう？』

『ね、あの女、人を愚弄しやがるんだ。さうだらう？　ね、だから、僕は、それが好意にしたところで、そんなへんてこな好意は受けられないと、きッぱりと云つて叩き返してやつたんだ』

『さう？』

靜代は、何かじつと考へ込むやうな眼附をした。

『あの女は實にへんな女だよ、はゝゝ』

專一は笑つたが、靜代は妙に笑へない氣がした。

『どうしたの？　靜代さん』

『え？』

『何をぼんやりしてゐるの？——何か考へてゐるの』

『いゝえ、別に——』

靜代は、ちらと專一を見てから口の中で云つた。戀する者の不思議な敏感さ！　房子は若しや專一を愛してゐるのでは無からうか？　いや、屹度專一を愛してゐるに違ひ無い！　と、靜代はその時はつきりとそれを感じたのであつた。

二人の畫家

その隱れた保護者のことが、時々ひどく氣になる事もあつたが、併し專一は、兎に角、安らかな幸福な靜養の時をその海岸の家で過す事が出來た。

健康が、次第に回復して來るに伴れて、專一の藝術慾は抑へ難く燃え立つて來た。彼は氣分の

いゝ時を見ては、靜代にポオズをとらせた。そして、その愛の肖像の、第二の製作にとりかゝつた。

彼にとつて、愛は卽ち藝術であり、藝術は卽ち愛であつた。彼が、靜代を前に置いて畫架に向ふ時、そこに愛と藝術との完全な融合があり共働があり一致があつた。彼の手なる刷毛の、その動きの一つ毎に、無言の愛の言葉が籠められ、彼の魂の底からの熱い息吹が、直に色彩となり線となつた。彼は、一心不亂に描き續けた。そこに高揚せられたる藝術的情熱は、同時にはげしい愛の情熱と燃え合つた。

『ねえ、靜代さん』

仕事のあとの疲れに、ぐつたりと籐椅子に倒れかゝるやうにした專一は、靜代と、畫布の上の描きかけの肖像畫とを等分に見くらべるやうにして、

『今度のは前のより、又、ずつとよくなりさうだ。僕は屹度、此の繪を不朽の傑作にして見せますよ』

『でも、あまり無理をなすつてはいけませんわ。あなたは、お仕事をなすつた日は、夜になると

屹度熱をお出しになるのですもの。今日も、少し疲れ過ぎなすつたやうですわ』

『アルス、ロンガ、ギタ、ブレビユス――か。此の言葉の本當の意味は、藝術の道の難さに對して、人間の生命の短さを嘆くにあるのだといふが、さう考へるのは、僕などには少し苦し過ぎる。どう間違つても、僕あ、長くは生きられさうもないからね。短い命、その中でもとりわけ短い命――といふ氣がするからね。生命は短し、されど藝術は長し！　僕は矢張此の言葉をさういふ意味にとり度いのだよ。僕は死んでも、僕の繪は殘る。いや是非共此の繪を、さういふ不朽の傑作としなければならない』

專一は、昂奮して云ひ續けた。

『僕は僕の生命を此の繪の中にうちこんでおく。僕はすぐに死ぬかも知れない。しかし、僕の藝術は、僕の生命の短さを超えて長く殘るだらう。アルス、ロンガ――この言葉はさういふ意味でいゝ言葉だね。が、それだけぢやあない。此の繪が長く殘れば、此の繪に打ちこめられた僕の愛も、つまり永久に不死のものとなるのだね』

『でも、そんな風に仰有られると、私何だか心細い。あなたは藝術家でいらッしやるけど、私は

たゞの女よ。私は、あなたが早く癒くおなりになつて、何時までも何時までも生きてゐて下さらなくちや可厭、死ぬかも知れない――などと、假にもそんな事仰有つちや可厭ですわ』

『はゝゝ！　大丈夫だよ。それは「たとへ死んでも――」といふ意味で云つて見たまでさ。僕はそんなに脆くくたばつたりなんかしないよ。今死んでたまるものか。大丈夫だよ』

專一は笑つて、涙含んでゐる靜代の肩を輕く抱いて、

『もう、二月か三月斯うしてゐれば僕の健康は十分に恢復するよ。さうすれば、僕は生活の爲めにも大に働いて、今まで靜代さんに苦勞させた埋合せをするよ。――それに、斯うしていつまでも他の好意に縋つてゐるのは心苦しいからね』

『えゝ、早く癒くなつて頂戴』

『大丈夫だよ』

硝子障子からさし込む午後の日は明るい光を部屋一ぱいに漲らしてゐた。今日は風も無く、遠い波の音も、季節に似合はず、なごやかな響を送つて來た。軒に近い松の梢のあたりで、何の鳥か、ちゝと囀る聲も長閑だつた。

その同じ日が、東京麹町の高臺の榛澤邸の、房子の部屋の、美しい模樣のある窓帷の間から、華やかに飾り立てられた部屋の中にもすべり込んでゐた。

部屋の隅の長椅子には、房子が、黑ッぽい色の着附で、すこし顏を斜めにした姿勢で坐つてゐた。――そしてその前に畫架を据ゑて、狂氣染みた眼で、房子と畫布とを代る〴〵見ながら、一生懸命に刷毛を動かしてゐるのは、あの三好明であつた。

突然、房子はそのポオズを崩した。そして、

『三好さん。私、もう可厭！』

と叫ぶやうに云つて、ついと長椅子から立つてしまつた。

『もう少し――もう少し――』

その熱中を中斷された三好は、刷毛をもつた手を、二三度大きく振りながら、哀願するやうに云つた。

『可厭よ。もう――』

『困るなあ、どうも――。困るなあ――』

三好は泣きさうな顏をした。

『馬鹿らしいわ。退屈で、窮屈で、やりきれやしないわ』

『だつて、まだ十分――いや、五六分しきや坐つて下さらないぢやないですか?』

三好は一寸腕時計をのぞきながら云つた。

『うそ、三十分は大丈夫坐つたわ』

『否いや! 十分ですよ。否七分。かつきり二時にはじめたのだから正確に云へば――八分と少し。ほんの一刷毛やつたばかしのところなんですがねえ』

『でも、私、もう可厭。私、今日は頭痛がするの』

『後生ですから、おくさん、もう少し――今日は、少なくとも二十分は坐つてゐて下さる筈のお約束だつたぢやありませんか?』

『でも、私可厭なの』

『今日は大へん工合がよささうだつたんだがなあ!』

と、三好はうらめしげに畫布を眺めてから、その眼を再び房子に移して、

『あなたの顏は實に妙だ。非常に明るく美しく見える時がある。反對に非常に暗く――見える時がある』

『暗く、而して醜く?』

房子が笑ひ乍ら問ひ返した。

『たとへ、此の百合の花がですね』

と、三好は卓の上に置かれた温室咲の百合の花を鹿爪らしく指して、

『たとへ、此の花が黑く見える事はあらうとも、あなたが、醜く見える事は斷じてありませんよ。あなたはいつも美しい。しかしその美しさが始終違ふのです。非常に明るい美しさの時があり、さうでない、妙に暗い美しさの時があるのです』

『そんな風に變るの?』

『變るのです』

『ほゝゝ、ぢや、まるでカメレオンね』

房子は冗談らしく云つたが、三好は飽迄も眞面目くさつて、

『つまり、あなたの美しさの中には、天國の美しさと、地獄の美しさとが同時に存在してゐるのです。云ひかへれば、神の美しさと、惡魔の美しさと、天女の美しさと、魔女の美しさとが同時に存在してゐるのです』

『それで、今日は私の顏何方？　天女の方、それとも魔女の方？』

『今日はあなたの顏は非常に明いです』

『ぢや、つまり天女の方』

『えゝ、さうです』

『ほゝゝ、馬鹿らしい』

房子は一笑に附さうとしたが、しかし、三好の言葉には唯、笑つてしまへないやうな意味が含まれてゐるやうに思はれた。

『つまり、私がいゝ子になる時は、私の顏が明るくなるのね。私が惡い子になる時は、私の顏が暗くなるのね』

『さうです』

三好は、いつもの道化者とは似もやらない斷乎とした調子で答へた。

『私の本性は、どつちなの？　私、大へんいゝ子になる時と、大へん惡い子になる時とがある—それが、自分でもよくわかるの。だけど、私の本性は、一體どツちなの？』

『あなたはね。おくさん、矢張いゝ子なのですよ。あなたの感情や性格は大へん複雜だ。しかし、本當のあなたの心は、單純で、そして美しいのです』

『然う？　あなたはさう思つて呉れて？』

『えゝ、さう思ひますよ』

『でも、世間の人は、私を大へんいけない女だと思つてゐるのよ』

「世間の人」といふ時、房子は、あの專一の怒りと嘲りとを帶びた冷酷な眼附を思ひ出したのであつた。

『それは間違つてゐますよ』

『大へん惡い女のやうに云はれるもんだから、私もそんな氣になるのよ』

『あなたを惡い女だといふ人があれば、それはあなたをよく知らない人です。僕は知つてゐる。あなたがどんな人であるかといふ事を――』

三好は、その細い小さい眼に悲みの色を湛へて云つた。三好はいつもの道化者では無かつた。彼の肅然とした言葉附には、房子の肺腑を擊つところの、强い響が籠つてゐた。

『あなたは、私を――本當の私をよく知つてゐて下さるのね』

『恐らく然うでせう？　だから、おくさん、あなたの本當の姿を描く事の出來るのは僕だと思ふのです』

房子は妙に涙ぐましい氣がした。何か、熱い塊のやうなものが、胸底からこみあげて來るやうな氣がした。しまひにわッと聲を放つて泣き出したい氣がして來た。

房子は、本當に、もう少しでわッと泣き出すところだつた。――が、最後の一秒間で彼女はそれを堪へた。而して、まるきり外の感情が、突如として彼女の衷心を衝き動かした。

『ほゝゝ！　あなたは馬鹿ねえ！』

房子は、わッと泣き出す代りに、斯う聲をあげて嘲笑つた。

三好は、呆氣にとられて、たゞ眼をぱちくりとさせてゐた。

『あなたのやうなヘッぽこな畫かき屋さんに何が描けるもんですか？　何が、ほゝゝ！　何が描けるもんですか？』

『それは、僕は、畫は拙い――拙いかも知れません。しかし、僕は技巧で描くのぢやないのですよ。心で、魂で――』

三好は氣の毒なほど慌てゝ、吃り〳〵云ひ續けた。

『心で、魂で、あなたの本當の姿を描いて見せる――描いて見せるんですよ』

『馬鹿仰有い！』

房子は用捨無く叩きつけて、

『私の本當の姿、それをあなたが知つてゐるものですか。あなたは、私を惡い女ぢやあ無いつて仰有つたわね。大間違ひよ。私は自分が、どんなに惡い女かつて事よく知つてゐますわ。えゝ、よく知つてゐますわ』

『それは違ふ――あなたは――本當のあなたは――』

三好は一生懸命に抗辯したが、房子は狂氣のやうになつて遮二無二と叫んだ。

『私は惡魔よ！　魔女よ！　妖婦なのよ！』

『いゝえ、それは違ふ！　なるほどあなたはそんな風にも見えます。けれどもそれはうそのあなたです。本當のあなたは――』

『生意氣な事仰有い！　あなたなんぞに、本當の私がわかつてたまるもんですか？』

『おくさん！』

『うるさいッて事よ！　私、もうあなたの繪のモデルになる事お斷りします。ほゝゝゝ、あなたなんかに、何が描けるもんですか？』

『おくさん！』

三好は憤然として云つた。

『どうぞ、僕の藝術を侮辱するのは止めて下さい！　僕の人間はどんなに侮辱されても仕方がありません。たゞ、僕の藝術は何人の侮辱をもゆるさないんです。僕にだつて藝術家としての自尊心はあるのです』

『ほゝゝ！　あなたに自尊心がある？　あなたに自尊心があるなら、犬にだつて自尊心がある筈だわ』

房子は飽迄慘酷に嘲りつゞけた。

『なるほど、僕は犬かも知れません。僕はあなたの前には、犬よりもつとみじめな人間です。しかし、僕は藝術家です。僕はこれでも――』

皆まで云はせず、房子は罵つた。

『そんな藝術家なんぞ、それこそ、犬に喰はれてしまへ！　だわ。さあ、もうお歸りなさい』

三好は、畫架の前に突立つたまゝ、じつと唇を嚙みしめた。彼の、垢じみた痩せた頰には涙が傳はつてゐた。

その三好を尻目にかけて、房子は衣摺の音をすつ〳〵と立てゝ室の外へ出て行つてしまつた。

房子が、出て行つてしまつたあと、三好はそのまゝの姿勢でまるで化石したやうに凝然と立つてゐたが、やがて、急に身體の心棒がずり落ちでもしたやうに、へたへたと床の上に崩折れた。

そして、神の前に跪くやうな恰好をして、兩肘の間に顏を挾み、兩手の指を亂髮の中に突込ん

で、しのびやかにすゝり泣きをしはじめたのであつた。

部屋を出た房子は、日光室の方へ廊下を歩いて行つた。

と、ふと、足もとに白いものが落ちてゐるのが眼に止つた。拾ひあげて見ると一通の手紙だつた。宛名は、榛澤龍彦、差出人の名は、たゞ靜代とだけ書いてあり、その肩に「小田原にて」と小さく認められてあつた。

それは、靜代から龍彦への手紙であつた。多分龍彦の洋服の衣嚢の中から、手巾でもとり出す拍子にこぼれ落ちたものだらうと思はれた。

房子は、中から書簡箋をぬき出して眼早く讀み取つた。

（――おかげさまにて、病人の様子は日毎によくなつてまゐります。この分ならば、もう遠からず健康を恢復致す事と存じます。ひとへに、兄上様の御厚情による事とまことに感謝に堪へない次第でございます。都築も、隱れたる保護者として、どんなに深い感謝を捧げて居りますことか？　それが皆あなた様の御情と知りましたら、必ず今までの片意地を解き心からの御禮を申上げるやうになるだらうと存じます。いづれ、萬事がわかる時が來る事と存じます。仰せの通り、自然にその機會がまゐります迄、あなた様のお名前をば矢張かくして置いた方がよろしいと存じます。

さて、仰せにまかせ、明後十四日の午後三時頃までに例のところへまゐります。まことに面伏ながら例のもの拜借出來ますやう、山々、お願ひ申上げます）

手紙にはそんな風に書かれてゐた。

房子は、つめたい笑ひを口もとに浮べた。而して、その手紙を帶の間に挾んだ。

狼の口

靜代は、身支度を整へると、改めてもう一度云つた。

『それぢや、行つてまゐりますわ。遲くも九時頃までには歸りますからね』

『あゝ、成る可く早く歸つて來て呉れ』

專一は、寢床の上に身を横へた儘で云つた。生憎今朝から少し工合が惡かつた。病氣の爲めに弱々しくされた專一は、半日の留守にもひどく淋しげな頼り無げな顏を見せた。それを見ると、

靜代もうら悲しくなつて、

『ね、すぐに歸つて來ますからね。お淋しいでせうけれど、待つてゐて頂戴』

と、子供をなだめるやうな調子で云つた。

『その代りね、お土産買つて來てあげますわ』

『あゝ』

專一は淋しく笑つて、

『お土産は何うでもいゝが、繪の具は忘れないでね。——そして、山岸さんに吳々も宜しく云つてお吳れ。もうすぐ良くなる。身體さへ癒れば、此の御恩は屹度返すからとね』

『えゝ。——でも、そんな事餘り氣になさらない方がいゝわ。あの方何も彼も承知していらッしやるんですからね。お禮は、私よく申上げて置きますわ』

『あゝ、よく御禮を云つてお吳れ。そのうち僕も出掛けて行つて、親しくお禮を云ふつもりだが——。あなたにも本當に濟まないな。そんな乞食のやうな眞似をさせるなんて』

專一は稍〻激越な調子になつた。

『あら！　乞食のやうだなんて！　先方から進んで好意を有つて下さるんですもの、此方は唯、その好意を受けてゐるまでの事ですから、そんな風にお考へになる事は無いわ』

『それは然うだけれど——』

『ね、あまり、そんな事を氣にしちや駄目よ。——ぢやあ、遲くなるといけませんから、私出かけますわ』

靜代は、專一の枕元を離れた。而して家を出た。

靜代が東京驛に着いたのは、約束の午後三時に二十分程前だつた。靜代は、曇り日の、埃ッぽい風の中を、驛前の廣場を横切つて丸ビルの建物の中にはひつて行つた。そこの、ある喫茶店で龍彥が待合せて吳れる筈だつた。月々の金を、靜代はいつも此の手順で龍彥の手から受取る事になつてゐた。

靜代は、おづ〳〵とその喫茶店の扉を押した。而して、龍彥がそこに來て居るかどうかと、素早く中を見廻した。見知らぬ客が二三人ゐるきり、龍彥の姿は見えなかつた。それで、靜代は、中にはひりそびれて、扉に手を掛けたまゝ一寸躊躇してゐると、隅の方に坐つてゐた若い男が、

つか〳〵と立つて來て、

『都築さんでございますか？』と慇懃な態度で云つた。

『は』

靜代は、その黑い背廣の色の生白い會社員風の男の顏を物まどはしげに眺め乍ら云つた。

『私は、榛澤さんの社の者で、榛澤さんに云ひつけられた者です。今日、榛澤さんは時間の都合でこゝでお待ちする事が出來なかつたので、それで私が——』

輕快な調子で云ひながら、男は衣囊から名刺を出して、靜代に渡した。

それは龍彥の名刺だつた。それには、一寸都合が惡くてそちらへ出向かれないから、此の使の者と一緒に來て頂き度い——といふ意味が認められてゐた。

『で、おつれして來るやうにと、私が云ひつけられて居りますんですが——』

黑い、すばしこい眼で靜代の顏を見ながら、その男は云ひ添へた。

『左樣でございますか？　何方へまゐりますんでせう？』

靜代は稍〻當惑を感じながら云つた。

『なあに、一寸すぐそこなのです。自動車の用意がしてございますから』

男は、先に立つて扉の外へ出た。男の素早い動作は、靜代に遲疑の餘裕を與へなかつた。靜代は、男に導かれて、その建物の前に置かれた自動車に乘つた。

男は、靜代を乘せると、自分は、彼女と斜めに向き合ふ位置に、補助椅子に腰をおろした。運轉手が萬事心得てゐると見えて、自動車は行先を云はないうちに走り出した。

山下町の方にあるといふ龍彥の會社か、でなければ、銀座邊の珈琲店か何かだらう？　と、靜代は稍〻困惑を感じながらも、別段疑つて見ようとは思はなかつた。が、自動車が、丸の內を駛りぬけて、豫期したとはまるで別の方角に進んで行くのを見ると、靜代は次第に不安の念に駈られて來た。

『あの、どちらへまゐりますんでございませう？』

靜代は、同車の男に、斯う尋ねて見ずにはゐられなかつた。

『もう、直ぐですよ』男は、何氣無い調子で云つたが、ちらと靜代を見た橫眼に、何か知ら無氣味な微笑が浮んでゐた。

『遠いところなんで御座いませうか？』

『いゝえ、もう直ぐなのです』

二十分ばかりの後、自動車は、とある町の同じやうな構への家だけが建ち續いた通りにはいつて、そこの一つの門の前に停められた。

『どうぞ、お降り下さいまし。榛澤さんは此處であなたをお待ちで御座います』

男は、慇懃に云ふのであつた。

靜代は、自動車を降りた。

『どうぞ、此方へ』

男は先に立つてずん〳〵と門をはひつて行つた。植込を兩側にした飛石道に一歩足を踏み入れた時、靜代ははッとした。お料理屋か知ら？　何てへんなうちなんだらう？

『さあ、どうぞ』

男は立ちどまつて、振返つて、躊躇する靜代を促すやうにした。不安な豫感が靜代の胸を掠めた。靜代はいつそ此のまゝ逃げ歸つて了はうかと思つた。が、今日是非持つて歸らねばならぬ金

の事を考へると、その決心もつき兼ねた。彼女は、重い歩みを激ますやうにして男のあとについて行つた。

磨かれた格子戸が、男の手でがらりと引開けられた。と、同時に、奥の方からばた〳〵と足音がして、銀杏返しに襟附の着物を着た女中が出て來た。

『あら、いらッしやい』

女中は、にこやかに笑つた。

『榛澤さんのお客様を伴れて來たんだ。案内してあげて下さい』

男はにやりと女中に笑つた眼で、格子戸の外に身をそばめるやうにしてゐる靜代を顧みた。靜代はおど〳〵としてゐた。靜代の俯せた視線に、盛鹽の崩れが白々と映つた。妙なものがある——と靜代は思つた。靜代は、今はひらうとしてゐるのが、あらゆる淫逸の巣なる『待合』と稱する家である事は、全然知らないのだつた。

『榛澤さん、先刻からお待兼でございますよ。さあ、お嬢様、どうぞ——』

女中は、口では愛想好く云ひながら、しかし、眼は冷たい好奇心に輝かして、しよんぼりと立

つてゐる靜代の姿を見上げ見おろすやうにした。

『さあ、おあがり下さい』

土間に突立つてゐた男は、何と思つたか、格子戸の外へ出て、外から靜代の背を押すやうにしながら云つた。

「こゝに、榛澤さんはいらッしやるんでございますの」

靜代は思ひ惑ひながら尋ねた。

『えゝ、もう先刻からお待ち兼で——さあ、どうぞ』

と、女中は、手をひいて、引きあげないばかりにする。前から引かれ、うしろから押されるやうにして靜代は上にあがつた。滑かに拭きこまれた廊下が彼女の前に續いた。一歩毎に、彼女の不安は加はつた。へんだわ！ と、彼女は心の中でかうつぶやいて、ふと立ち停まつた。

『どうぞ、此方へ』

と、女中は振返つて、促すやうに云つた。思ひ切つて逃げ出すだけの勇氣は矢張無かつた。靜代は女中に導かれるまゝに、その廊下を幾曲りかした。

その部屋の前に來ると、女中は膝を突いて襖を明けた。而して、

「お客様がお見えでございますよ」

と、告げてから、

『さあ、どうぞ』

振返つて靜代に云つた。

『此方へはひつて下さい』

龍彦の聲が中からした。——靜代は勇氣を鼓して部屋へはひつて行つた。

『やあ、よく來て呉れましたね。お呼び立てしてすまなかつたですね。さあ、此方へ！』

襤袍姿で、紫檀の卓の前にあぐらをかいてゐた龍彦は、靜代の姿を見ると、にこ〳〵と笑ひ乍ら云つた。卓の上には、二三本の銚子などが置かれ、龍彦の顏は、赤く醉に燃えてゐた。

靜代は、三四尺も離れて坐つた。そして、挨拶をしようとすると、龍彦は大きく手を振つて、

『さあ、もつと此方へ寄つて下さい。實は、待ち兼ねたんでね、退屈紛らしに一杯やつたところなんですよ。おい、お牧さん』

と、龍彦は女中に呼びかけて、

『何か見つくろつて持つて來て吳れ給へ。それからうんと熱い奴をね』

『はい、はい！』

女中は、妙な微笑で、龍彦と、堅くなつて坐つてゐる靜代とを見較べながら部屋の外へ出て行つた。

危機

『こんなところへお呼び立てして本當に失禮ですがね、一緒に飯でも食つて頂き度いと思つてね』

二人きりになると、龍彦が一層打解けたぞんざいな調子になつて、

『さあ、そんなとこに居ちや仕方がない。此方へおいでなさい』

と、命令するやうに云つた。

『は、あの——』

と、靜代は、益〻堅く身體を引締めるやうにしながら、

『私、早く歸り度いのでございますが——』

『すぐに歸してあげますよ。そんなに長くお引止めしようとするんぢや無い。まあ、一緒に飯でもやりませう。それに、一寸御相談し度い事もあるんでね。——兎に角、そこぢやあ話が出來ない。こゝへ來て下さい』

卓の前の八反の座布團を指しながら、龍彦は再び繰返した。

『でも、私——』

靜代がもぢ〳〵してゐるのを見ると、龍彦は財布から、別に紙包にしてあつたのを取出して、

『例のあれ差上げますよ。まあ、此方へいらッしやい』

餌に釣られるやうな恥ぢがましさを感じながらも、その紙包みを受取る爲めには、靜代は卓の前まで進み寄らねばならなかつた。

『あすこまで持つて行つてあげるお約束でしたがね。一寸用事があつたものですから——』

『いゝえ、私こそ、我がまゝばかり申上げてすみませんで御座います。では、拜借させて頂き

ます』

靜代は手をさしのべて卓に置かれた紙包みを受取つた。而して、一寸押し頂くやうにしたが、それなり直ぐに藏ひ込むのも稍ゝ工合が悪いといふやうに、膝の上で爪探りながら、

『本當に、おかげさまで――何とお禮を申上げてよろしいかわかりませんので御座います』

『いや、なあに――』

と、龍彦はおうやうに、

『此の前より少し多くして置きましたよ。それでもまだ不足のやうでしたら、どうぞ遠慮なく云つて下さい』

『ありがたう御座います』

『どうです。少しは良い方ですか？』

『えゝ。大分よろしくなりました。あの分なら間も無く恢復するだらうと存じます。――では、私、あの、遲くなるといけませんから、失禮させて頂きます』

『まあ、宜いですよ。今、飯を云ひつけてありますから、喰べて行つて下さい』

『いゝえ、私、欲しく御座いませんから――』

『然う云はずにまあつき合つて下さい。はゝゝ！　何もそんなに逃げて歸らないでも宜いでせう別に僕があなたを捕つて食はうといふんぢや無いんだから――』

『ですけど、私――』

靜代は困り切つた顏附で、哀願するやうに龍彦の顏を見上げた。

『御迷惑かも知れませんがね、あかの他人と云ふんぢやあ無し、一緒に飯ぐらゐ食つて下すつても宜かあ無いですか？』

龍彦は、どんよりと濁つた眼を熱ツぽく輝かして、にや〳〵笑ひと共に云つた。靜代は、その何となくみだらがましい微笑と、じり〳〵と押迫つて來るやうな眼眸とを、堪らなく無氣味なものに思ひながらも――また、そのあまりに狂々しい無禮さを腹立たしいものに思ひながらも、併し、席を蹴つて起つだけの決心も附き兼ねた。恩を受けてゐる、物質上の惠みを受けてゐる――といふ意識が重く彼女の心にのしかゝつてゐた。こんなお金など要りません！　と、手なる紙包みを叩き附けて出て行かうとも思つたが、此の金が、此際どんなに必要であるか？　これが無か

つたら、病人の夫をかゝへて明日の糧にさへ困るのだと思ふと、思ひ切つてさうする事も出來ないのであつた。

と、そこへ女中が、新しい銚子だの、食べる物だのを運んで來た。女中は、それ等のものを手際よく卓の上に並べると、

『さあ、お一つ』

と、銚子を取りあげた。それから、靜代にも杯をさしつけて、

『いかゞでございます？』

靜代は、眞赤になつて、首を振つた。

『ぢや、御飯の時はお呼び下さいまし。お孃樣にお酌はお任せして――ほゝゝ！』

女中は、靜代の方に、意味あり氣な笑ひを投げ掛けて、

『どうぞ、ごゆるりと――』

勿體らしい調子で云ひ捨てゝ出て行つた。女中がついで行つた杯をぐつと乾すと、龍彥は、それを靜代に突き出して、

『どうです。ひとつ』

『あら、私――』

飛んでも無い事と云ふやうに、靜代は、思はず二三寸膝をあとじさらせた。

『はゝゝ！　いけませんか。ぢや、失禮だが、一つついで下さい』

云はれると、可厭とも云へなかつた。靜代は銚子をとりあげると、遠くの方から、手をのばすやうにして、突き出された杯に酒をついだ。手が慄へて、銚子の口が杯の緣に、かち〳〵と音を立てた。

『靜代さん。どうしてそんなにふるへるのです？』

龍彥は、上眼で靜代の顏を見ながら、

『はゝゝ！　そんなに僕が怖いのですか？』

『いゝえ』

靜代は再び膝をあとじさらせながら、

『あの、もう遲くなりますから、どうぞ、歸らせて下さいませ』

『そんなに仰有らないでも、直ぐに歸らしてあげますよ。東京驛まで僕が送つてあげます。なあに、まだ四時少し過ぎたばかりですから大丈夫です。はゝゝ！　靜代さん、あなたはそんなに御亭主の事が氣になるんですか？』

『何分、病人なんで御座いますから――病人がたつた一人で待つて居るので御座いますから――』

靜代は、おど〳〵と戰く眼で、龍彥の顏を見上げた。

『いや、事一君は實に幸福者ですね。僕はつく〴〵專一君を羨ましいと思ひますよ。――たとへ、肺病で、血を吐いて死なうとも、專一君は實に羨む可き幸福者だ。僕も、せめて百分の一なりと、專一君にあやかり度いですよ。靜代さんの樣な美しい人を妻にして、しかも、そんなにまで深く愛せられてゐるなんて、實際少し幸福過ぎるといふ者だ。正直に云ひますがね、靜代さん僕は專一君に嫉妬を感じるのですよ。あんな病人のくせに――はゝゝ！　怒つてはいけませんよ、靜代さん、實際、專一君は少し贅澤過ぎるのです。病人の看護婦には、あなたはまつたく勿體無い。若し、僕がですね、あなたのやうな人を妻と呼ぶ事が出來るならばですね、僕はあらゆるものを犧牲にして悔いない覺悟があるのですがね』

龍彥は、手酌で、ぐい〳〵と杯を重ねながら、醉と共に益〻赤くなる顏に、眼を異樣に熱ばせながら、そんな風に云ひ續けるのであつた。

『まあ、何を仰有るのでございませう？』

靜代は腹立たしさと、より以上の恐怖とを以て、僅かに斯う云つた。

『いや、實際ですよ。――あの、いつか、銀座の珈琲店であなたを口說いてゐた男があつたでせう。あなたのやうな美しい人が、自分の價値を知らないで、自分を粗末にしてゐるのを見るくらゐ、男性の心を苛立たせる事は無い――あの男は慥か斯う云つてゐた。今にして僕は、あの男の言葉に同感の意を表せざるを得無いのですね。いや、勿論、專一君は立派な男かも知れん。あなたの夫として恥かしくない立派な男かも知れませんがね、しかし――』

『あの、私、本當にもう失禮させて頂きます』

靜代は、靑褪めふるへながら、つと立ちあがらうとした。

『はゝゝ。怒つたんですか？　お氣にさはつたら、どうぞ御免下さい。いや、なに、別に惡氣があつて云つたわけぢやあ無いのですから――。今、飯を濟ませば、僕も歸ります。僕が東京驛ま

で送つてあげますよ。どうもあなたも現金だな。受取るものさへ受取れば、それですぐ歸つてしまふなんて――それぢやあ、あまり現金といふものですよ』

『あら！　私、そんなつもりぢや御座いませんけど――』

靜代は赤くなつて、

『私、これお返ししますから――』

帶の間に藏つた紙包みを取出して卓の上に置いた。赤くなりながら、靜代の眼は怒りに燃えてゐた。

『はゝゝ！　冗談ですよ。冗談ですよ。靜代さん、そんなに直ぐ怒つてしまつちやあ困ります』

龍彥は笑ひに紛らして、

『どうもあなたは一本氣で困るですな。それぢや、うつかり冗談も云へやしない。まあ、そんなへんな眞似をしないで、それはそつちへ藏つてお置きなさい。要らないといふなら兎に角、それは是非無けりや無らないものなんでせう』

云はれて見れば、然うだつた。――こゝで、龍彥を怒らして龍彥から援助の手を絕たれてしま

つたら、病氣の夫をどうしよう！　龍彥の妙な言葉も、たゞ酒の上の冗談かも知れない。それなら尙更の事、何とかして體よく此場を逃げる工風は無いものかと、靜代はとつおいつ思ひ惑ふのであつた。

諜者

房子の客間は、その夜はかなり賑かだつた。作曲家の青木保雄、青年詩人の日疋厚、此の二人は此頃の定連だつたが、今夜は、その外に一人新顏が加はつてゐた。新顏と云つても、房子がまだ女學生であつた頃には、房子の兄の贊之助と友人であつた關係から、よく房子の家にも遊びに來、房子ともずゐ分隔てのない交際をした事のある、謂はゞ幼馴染の白川孝藏といふ青年紳士だつた。

大ブルジョアの一人息子で、高等學校を中途で止めると佛蘭西に行き、あちらの學校で勉强してゐるうち、そこで纖人が出來てたうとう家庭生活にまではいり、十幾年かを異鄕に過して最近歸朝して來たので、その話し振から物腰から、いや、眼附顏附のそれに至るまで、何となく西洋

人染みて見える程、西洋の水の浸みこんでゐる男であつた。勿論、金があるので、別に職業に就く必要もなく、かと云つて學問の興味もないのだから、いくつかの大學に籍は置いてゐたが、學位一つ持つて來はしなかつた。その代り、旅行、スポーツ、音樂、演劇、それ等の事について、は、豐富な話材を持つてゐて、巧妙な話術によつて語られるそれ等の話は、深く一座の興を動かした。

『イサドラ・ダンカン？　會ひましたよ。巴里で一寸會ひましたが、あれは仕方が無い醉ッ拂ひですね』

とか、

『アアキペンコも獨逸へ行つた時、訪ねて見ました。あの人は隨分勉强してゐますよ』

とか、そんな話も先づ一通り濟んでしまふと、孝藏はだしぬけに、

『だが奥さん、此の家にあなたをお訪ねしようとは思ひませんでしたよ』

と、妙な笑ひを含んで云ひ出した。

『と、仰有ると、どう云ふ意味なので御座いますの』

房子も微笑を返しながら云つた。

『いや、こんな事を申し上げては失禮かも知れませんが、榛澤夫人として此處に貴女を見出した事は、僕は何だか不思議な——と云つちやをかしいが、兎に角非常に思ひ掛けなかつた事のやうな氣がするのですよ』

『まあ、さうでせうか知ら。それは何故で御座いませう？』

『何故と聞かれると困りますが、何故とも無く唯、そんな氣がするのです』

と、孝藏は匂ひのいゝ葉卷の煙を吐きながら云つた。

『ぢや、私が未だ獨身ででもゐるとお思ひになつたのでせうか？』

『はゝゝ。その通り！　そのつもりで僕は歸つて來たのですが、歸つて見て大いに失望したといふ譯です』

孝藏は、傍若無人に云つて退けた。勿論、笑ひにまぎらした戯言の調子ではあつたが、然し彼の妙な粘りつこい樣な眼附には、案外戯言ならぬ氣持も含まれてゐる樣に見えた。さう云へば、房子は女學生時代の昔に、此の男から戀文めいた手紙を幾度も貰つた事を思ひ出した。手紙だけ

では無い、たしかに一度、愛の告白を聞いた事もあつた筈だつた。

『でも、貴方は、あちらで美しい佛蘭西の娘さんと家庭をお持ちになつていらしつたと云ふ事ぢや御座いませんか。私は又、貴方はもう此方へはお歸りにならないものとばかり思つてゐたので御座いますわ』

房子も情を含んだ調子で媚びる様に云つた。

『はゝゝ。そんな事もありましたがね、あれは唯、旅の一つの挿話ですよ。たゞ一寸路傍の花を摘んで見たばかりの事なんです』

『まあ、薄情な方！』

と、房子は蓮葉に叫んで、

『たとへ異人さんだからつて、人情に變りは無い筈ですわ。何故、此處へ連れてはいらつしやらなかつたのです？』

『斯うなると、伴れて來た方がよかつた様ですな。——だが、要するに僕はもう一年早く歸るべきだつたのですね』

『でなければ、私がもう一年遲く結婚すればよかつたのかも知れませんわね』

と、房子は笑ひ乍ら云つたが、他の人達を見渡して、

『まあ、皆さんを前に置いて、大變な話をはじめましたわ。白川さん、少しお慎しみ遊ばせ』

詩人の日疋が、その時口を入れた。

『いや、ロマンチツクで仲々面白いです。然し、どうも一寸あてられますな』

『いや、どうも失禮』

と、孝藏は笑ひながら云つた。

『それはさうと——』と、ふと、思ひ出したと云ふ様に、『奥さんは都築專一君を御存じでせうか？』

『はあ、知つて居ります』

房子の顏は、見る〳〵靑褪めていつた。

『あの人と、僕は伊太利で逢ひましたよ。伊太利のベニスで。偶然同じホテルへ宿り合せて、一緒にゴンドラにも乘りましたが、先生すつかりホームシツクに罹つて、見るも憐れにしよげて居

ましたつけ。何でも、東京に戀人でもゐるらしい樣子でしたがね」

『まあ、さうですか』

房子は、冷然として云つたが、その顏には苦澁でも嚙んだ樣な表情が動いた。が、孝藏は、それには全然氣が附かないで、

『あの人は、今、どうしてゐますか御存じありませんか』

『えゝ、知りません』

と、房子はいま〳〵しげに云つた。

『都築は、今病氣で寢てゐますよ』

と、三好明がその時横合から云つた。云ひ忘れたが、その席には三好明も定連の一人として客のなかに混つてゐた。客とか定連とか云ふよりも、三好はむしろ房子の侍僕と云つたかたちで、此頃は毎日此の家に入り浸つてゐるのであつた。侍僕なら未だいゝが、どうかすると、飼犬か何かの樣な、そんな扱ひを、三好は房子から受けてゐた。さうした上流の夫人が、狆を愛したり猫を愛したり、鸚鵡や猿を愛したりする、丁度それの樣に房子は三好を愛してゐた。或ひは昔の王

侯が、侏儒や道化者やをその座右に玩弄する、丁度それの如く、房子は三好を玩弄した。房子の眼中には一人の人間としての三好明は無い樣に見えた。龍彥も、三好に對して丈は、夫としての嫉妬といふ樣なものは全然感じないらしかつた。

『病氣？』

と、孝藏は反問した。

『さうです。病氣をして弱つてゐるらしいです。素晴らしい天才なんだが、實に氣の毒です』

三好はやうやく自分の發言の機會を摑み得て斯う云つた。

『さうですか。都築專一氏は病氣なのですか？』

と、作曲家の靑木も口をはさんだ。

『あの、昨年の蒼穹會の「初夏」は、とても素敵でしたがなあ』

『あれは明かに彼の天才を證據立てる作品です。あのモデルが又素敵なんだが、あれは、都築の愛妻なんです』

三好は、熱心に說明した。が、三好は、其の時房子の鋭い眼が、ぢつと自分を見て居るのに氣

が附いたので、あわてゝ口を噤んで、云はうとした後の言葉を呑み込んだ。

と、その時、扉にノックの音がした。

『どなた？』

房子が、振り向いて問ひかけると、

『あの、奥様』

小間使の聲だつた。

『おはいり、構はないから』

房子がさう云ふと、靜かに扉が開いて、小間使がおづ〳〵とはいつて來た。

『お客様で御座いますが』

小間使は小聲で囁くやうに云つた。

『さう。どなた？』

『此の間いらしつた小澤さんとか仰有る方で御座います。何でも大へんお急ぎの様子でございます』

さう云ふ小間使の言葉を皆迄聞かずに、房子は云つた。

『では、階下の應接で一寸待たしてお置き、今直ぐ行きますから』

小間使は出て行つた。房子の顏には、妙にそは〳〵とした落着の無い表情が表はれた。それを見てとつた孝藏は、

『いや、どうも又すつかり御邪魔をして了ひました。失禮致します』

と、椅子から立ち上つた。三好を除く他の客達も續いて立ち上つた。

客室の客を送り出すと、房子は其の足で階下の玄關脇の應接室へはいつて行つた。

鼠色の合服を着た小柄な男が、きよときよとした眼附をして、應接の入口のところに立つてゐた。三十六七と見える、榮養不良らしく頰のこけた、ひどくひねこびた感じのする其の男は、其處へ房子がはいつて行くと、ぺこ〳〵と頭を下げた。——小澤と云ふ龍彦の會社の低い階級の社員であつた。

『さあお掛けなさい』

と、房子は鷹揚に云ひながら卓の前に腰をおろした。

小澤は房子の顏をその小さい眼でちらと見上げたが、やがて、低い聲で口早に云ひ出した。

『わかりました。大森の方で會つていらつしやるらしいので――。服部といふ男が、自動車でそちらへ案内して行つたのです。旦那樣は、始めからそちらで、大森の方でお待ちになつてゐて、その服部といふ男が自動車でお連れしたといふ事です』

『さう、それはたしかなの？』

烈しい眼で對手を睨むやうにしながら、房子は念を押した。

『たしかです。服部自身から突きとめたのでございますから』

小澤は小さい眼を糠星のやうにきらめかした。

『大森ね？　家もわかつてゐるの？』

『わかつて居ります』

『何て家？』

『彌生とか申しました』

『彌生？　お料理屋なの？』

『さうぢやございませんので――』

小澤は初めて顏を崩して、にやりと笑つた。

『お料理屋ぢや無い、ぢや宿屋？』

『宿屋でもありません。待合です』

『待合つて云ふと？』

小澤は、

『ひゝゝ』と鼻梁に皺をよせて笑つて、『奥樣は待合を御存じないのですか？』

『でも、それは藝者を呼ぶ處でせう』

『藝者とは限らないのです。連れ込みといふのがあるのです。いつてみれば、逢曳宿をも兼ねますんで』

『あゝ、連れ込み？　ぢや其處へその女を連れ込んだのですね』

『えゝ、まあ、そんな具合なので』

その男は、再び卑しく笑つたが、衣嚢から小さな紙片を探し出して、それを房子の前へ置い

た。その待合の所在が、丁寧な地圖で說明され、電話番號も書き添へられてゐた。

房子は、その紙片を手にとりあげて一瞥すると、

『どうも、ありがたう！』

と、禮を云つたが、その時、その男に、自分の樣子をある興味を以て觀察するやうな表情が露骨に動いてゐるのを見ると、ひどく腹立たしい氣がした。――その男は、もと房子の父に使はれてゐた男で、龍彥の會社にも房子の聲がかりで入社させたのであるが、房子は、この男に命じてひそかに龍彥の行動を偵察させてゐた。龍彥と、あの靜代との交渉がどんな風に展開されて行くか。それは房子の、復讐的快感で裏書された或る殘忍な興味から、尤も知らんと欲するところであつた。いかに龍彥が靜代を誘惑するか？　靜代がその誘惑をいかにして切拔けてゆくか？　否、おそらく、切拔け兼ねて、竟にはその魔手に落つるであらう徑路を、房子はその眼ではつきりと見てやりたかつた。靜代はやがて失はれる。靜代の失はれた時、あの男の前には地獄の口が開かれるのだ。あの男――自分の命賭けの愛情を、あのやうにも慘酷にふみにじつたあの男が、いかにしてその愛妻を奪はれるか？　そして、地獄の火に身を燬かるゝに至るか？　それを、は

つきりと此の眼で見て、あの男の苦みを、それ見よと、聲高く笑つてやらう！　それが、房子のたくらみであつた。さういふ房子のたくらみとは知らず、唯、單純な家庭婦人の嫉妬から、さうして夫の行爲を探らせてゐるのだと思ひ取つてゐるらしい小澤の樣子が、房子は腹立たしくもあればむしろ馬鹿らしくもあつた。

房子は、いくらかの報酬の金を摑ませてその男を歸してやると、自分の部屋に戻つて、長椅子の上に身を橫たへた。――ざあと橫しぶきの雨が窓を打つた。宵から降り出したのへ風が吹き加はつて、戸外はいくらか荒模樣になつてゐた。

あらしを衝いて

房子は、その雨の音に耳をあづけながら、きら〳〵と燃える眼を、じつと空間に睜つてゐた。彼女の眼の前には、一つの部屋が現はれた。その部屋に相對してゐる男女の姿があらはれた。でつぷりとしたあから顏を醉にほてらせ、野獸めく目をきらめかしてゐる男と、その男の前に靑褪めふるへてゐる女と――それが一枚の繪を彼女の想像の畫布に描き出した。彼女は、殘忍な微

笑を唇邊に浮べた。

男が何か云つてゐる。女がおど〳〵とそれに答へてゐる。會話は次第に急迫する。やがて、男がいきなり女に躍りかゝる。女の弱々しい身體が、男の逞しい腕に捻ぢ伏せられる——淺ましい、怖ろしい、地獄繪が、あくどい色彩をぱッと彼女の眼に擴げる——。

窓外の風雨は、刻一刻に勢を加へた。どつと、打ちつけた雨脚が窓の硝子を犇めかした。その時、彼女の耳には、鋭い女の悲鳴が、嵐の中からきこえて來るやうな氣がした——。

彼女は思はず立ちあがらうとした。が、彼女は自ら制して、じつともとのまゝの姿勢でゐた。彼女は、消えかゝつた唇邊の微笑を強ひて引き戻す爲に、不自然な表情でその顏面筋肉を硬張らせた。

その時、扉が開いて、怖る〳〵面をさし入れたのは三好だつた。

『こゝに——こゝにおいでになつたんですか？』

房子は懶げに振返つて、うるさいといふ眼附をした。

『はいつてもいゝですか？』

『まだ、あなたはゐたの？』

房子は邪慳な調子で云つた。

『もう、歸らうと思つてゐるところなんです』

『ぢや、お歸んなさいな』

房子は叩きつけるやうに言つた。

『失礼します。——ですが、奥さん！　お願ひですから、あの繪を僕に書き續けさせて下さい。毎日十分づつ、いや、五分づつでもいゝから坐つて下さい。もう少しで完成するのですから』

三好は哀願するのであつた。

『三好さん！　一寸、こゝへいらッしやい！』

房子は、急に調子を代へて云つた。

おや！　また御機嫌が直つたのかな？　とでもいふやうに、三好はそこへはいつて來た。

『そこへおかけなさい』

命ぜられるまゝに、三好は房子の前の椅子にかけた。

『私の顔を見て頂戴』

三好は、從順な小學兒童のやうに、云はれるまゝに、房子の顔を見上げた。

『私、どんな顔をしてゐて？』

三好は、激しくまばたきをした。

『私が、今何を考へてゐるか、あなたにはわかつて？』

『――そんな事はわからんです』

『私の顔は怖ろしくないこと？』

房子は、三好の顔を見据ゑるやうにして云つた。顔色は白紙のやうに蒼褪めてゐた。その眼には、暗い炎が燃えくすぶつてゐた。妙にとげ〳〵しい線が眼立ち、何か知ら惡魔的な、見るものの心を寒くをのゝかせるやうな表情が、冷たくそこに凝固してゐるのであつた。

『ほゝゝ！　怖いでせう？　こんな顔でも、あなたの書に描けて？』

じつと見つめる房子の眼と、見返す三好の眼と、四つの眼が空間で格闘した。

『おくさん！　あなたは、苦んでゐる。何か、非常に苦んでゐる。――何かに憑かれてゐる』

『憑かれてゐる？』

房子は反問した。

『さうです。憑かれてゐるのです。それで、そんな顔をしていらッしやるのです。それは、あなたの顔ぢやあ無い！』

『私の顔ぢやあ無い？』

『さうです。あなたの顔ぢやあ無い！』

三好は、はつきりと、自信を以て斯う云つた。

『私の顔が、私の顔でないなんて？』

『僕は、おくさん、あなたを愛してゐます。あなた自身があなたを愛してゐるよりも、もつと深く、僕はあなたを愛してゐます。だから、僕は、あなたを知つてゐる。あなた自身があなたを知つてゐる以上に、僕はあなたを知つてゐます！　あなたは、今苦んでゐる。あなたの魂は、ひどく苦んでゐる――』

三好は、一語々々に強い情熱を籠めて云つた。彼の顔は、すぐれた説教者のそれのやうに威嚴

と光彩とを帶びて來た。あのいつものおどけ者とは、がらりと人が變つたやうに見えた。

『魂？』

と、房子は、さうした三好の言葉の、惻々として胸に迫るのを感じながらも、強ひてあばずれた氣持になつて、

『魂なんてものが、一體あるものか知ら？』

『あるのです。あなたは、高貴な魂をもつてゐるのです。だが、あなたの魂は病んでゐるのです』

『ぢや、私は病人なのね』

『さうです！　病人なのです』

三好は儼然として云つて、

『おくさん！　あなたが何をそんなに苦しんでいらツしやるか？　僕にはわかりません。いや、わかるやうな氣もするんですが、はつきりとは判らないのです。兎に角、あなたは苦しんでゐる。あなたの魂は、何かに憑かれてゐる。何かに——惡魔に憑かれてゐる。——しかし、あな

たは、決して、そんな惡魔なんかに負けはしない。その魂を、決して闇に委ねはしない』

三好は、房子の顏を見据ゑながら、

『御覽なさい？　あなたはもうそのやうに悲しんでゐる。あなたの顏は、月光に照らされたやうに、悲みに濡れてゐる。あなたはもう怖ろしい顏なんかしちやゐない』

『ほゝゝ！』

と、房子は急に、冷たく笑ひ出した。

『何をべちやくちやとしやべつてゐるの？　うるさい人ねえ』

『いや、おくさん！』

三好が更に何か云はうとするのを、

『もう、澤山！』

と、素氣なく刎ねつけて、

『御說法はもうそれで澤山！　歸つて頂戴』

彼女は、腹立たしげにさう云ふと、くるりと背を向けてしまつた。

三好は、かなしげな眼で、しばらくの間、房子の横顔を見つめてゐたが、しづかに起ちあがると、そのまゝすつと部屋の中から出て行つた。

房子はふと眼をあげた。窓の硝子に映つた自分の顔が、その眼の前にあつた。

『房子！』

と、その顔が彼女に呼びかけた。

『お前は、あの三好の云ふ事を聞いたか？　あの男は、お前に何と云つたか？』

白い雨脚が、その顔を斜につんざいた。庭樹の梢が嵐に揉まれる音がする。その音の中に、助けを呼ぶ女の悲鳴がきこえる。

房子は、決然として起ちあがつた。起ちあがると、扉の外へ出た。

『三好さん！』

廊下のむかうに見える三好のうしろ姿に向つて、かう呼びかけた。三好は、歩みをとめて振向いた。房子は急ぎ足で三好に追ひ縋ると、喘ぐやうに云つた。

『待つて――待つて頂戴』

『何か御用ですか？』

『私、これから出掛けなければならない。あなた一緒に行つて頂戴』

『何處へお出かけになるのです？　此の暴風雨の中を――』

三好は怪訝さうに問ひ返した。

『それはあとで云ひます。兎に角、一緒に自動車に乗つて頂戴』

哀願と命令とをちやんぽんにして、房子は性急に云つた。

『自動車に乗つて、何處へ出かけるのです？』

『一緒に來て下さりさへすればいゝの！　お願ひですから、私に力を貸して頂戴』

『どうもをかしいですなあ。こんな晩に――』

『愚圖々々しちやゐられないの。さあ、一緒に行つて頂戴』

房子は階下に降りると、自分の口で、運轉手に自動車の仕度を命じた。

『へえ？　これからお出かけでございますか？』

運轉手は、びつくりして問ひ返した。

『急ぐのよ！　急いで仕度をして頂戴』

房子は、物狂はしいばかりの調子で命じると、手早く着物を着換へて出て來て、

『さあ、三好さん！　早く――』

と、どういふわけかまるきりわからず、ひどく面喰つてゐる三好を急き立てゝ、一緒に自動車に乘つた。

『今七時ね、大森までどのくらゐで行けて？』

『大森へいらッしやるのですか？』

運轉手が訊いた。

『えゝ。大急ぎで！』

『大森のどの邊ですか？』

房子は、先刻のあの小澤といふ男が渡して行つた紙片を腰の間からとり出すと、

『こゝに書いてある、この家まで大急ぎで！』

さう云ひながら運轉手にそれを渡した。

運轉手は口のうちで、その紙片の文句を讀み返して、

『彌生――と云ふのでございますね。待合か何からしう御座いますが？』

と、いぶかしげに問うた。

『さうなの！　出來るだけ急いでやつて頂戴』

運轉手は、妙な眼で、三好と並んで坐つてゐる房子の顏をのぞき込むやうにしたが、

『急ぐのよ！　愚圖々々してちや駄目！』

と、重ねて房子にあびせかけられると、やをら、舵輪を動かした。自動車は、やがて門を出ると、風雨を衝いて、全速力で走り出した。

何の爲に、この暴風雨の中を、大森などへ出かけてゆくのか？　しかも、行先の家が待合とは、三好は益々腑に落ちなかつた。

『おくさん！　どうして、そんなところへ行くんです？』

『三好さん！』

と、房子は激しく息を喘がせて、

『早く行つて、あの人を救ひ出さなければならないの。早く行つて、あの人を――』
『あの人を？　一體それは何人の事です？』
『靜代さん――都築さんのおくさんの！』
『都築の細君？　それを救ひ出す？』
『早く行かなければ――早く行かなければ――』
と、房子は物狂はしく叫んだ。
『もしもの事があつたら――私、あの人に濟まない。靜代さんにも、都築さんにも、私、濟まない！』
『もしもの事が――？』
三好は未だ腑に落ちなかつた。
『靜代さんが、今、惡者に誘惑されてゐるのですよ！』
房子はじれッたさうに云つた。
『惡者に？　それは大へんだ！　ぢや、その大森の待合に監禁されてでもゐるのですか？』

三好は座褥の上にとびあがらんばかりにおどろいて、
『それは大へんだ！　――惡者つて、一體どんな奴なんですか？』
『あとでわかる――あとで判ります！』
房子は身體を押揉むやうにして、
『私だつてその惡者の片割と云はれても仕方が無いんだわ！　だけど、三好さん、あなたの云ふ通り、私は、此の心を――魂を、惡魔に賣すことは出來無い！　早く行つて助けてあげなければ――助けてあげなければ――』
『さうですか？　何だか未だよくわからないが――兎に角そりやあ大へんだ！　運轉手君！　急いで呉れ！』
三好は、かう怒鳴つた。

妻歸らず

專一は、妻を東京へやつたあと、床の上に仰臥して、此頃讀みかけてゐる或る外國の小說を讀

み續けた。が、やがて本を支へてゐる手がだるくなつたので、ぱたりと枕もとに投げ出すと、その手を胸の上に組み合せて、ぼんやりと考へ込んだ。彼が、その書物を投げ出したのは、手がだるくなつたからばかりでは無かつた。その小説の筋の進行に次第に彼の心を暗くするものがあるからであつた。

一人の美術家があつた。一人の美しい娘と戀をした。その美しい娘には、澤山の求愛者があつたが、美術家は、それ等の多くの競爭者に打勝つて、その娘を獲、その娘と結婚して樂しい家庭を作つた。そんな風に、その小説は事件をはじめてゐた。よく似てゐる。全く自分達夫婦のことをそのまゝに描いたやうだと思つて、專一は、それを讀みながら幾度ほゝゑんだか知れなかつた。——が、その樂しい家庭が、やがて一つの大いなる不幸に見舞はれた。それは、美術家の病氣であつた。と、斯う筋が運ばれてゐるのを讀むと、專一はあまりに似過ぎてゐるので、却つて興褪めがして來るほどだつた。しかも、その小説は、次のやうな筋に展開して行くのであつた。

夫が病氣となると共に、妻の心は次第に夫から離れて行つた。妻には、いまだに執念く云ひ寄る昔の戀人があつた。夫を離れた妻の心は、次第にその昔の戀人の方に傾いて行つた。妻はたう

とう病める夫を捨てゝその戀人に走つてしまつた——。

その邊まで讀んで來た時だつた。專一が、その小説を投げ出したのは。

それは小説だつた。だが、專一は、それを單なる小説として讀み過す事が出來無かつた。彼は、その小説の中の主人公を自分と思ひくらべ、その小説の中の妻を靜代と思ひくらべて見ずにはゐられなかつた。

勿論、靜代は、その小説の中の「妻」のやうな女ではない。どうして、彼女の愛と貞節とをうたがひ得よう！ 專一は、深く深く靜代を信じてゐた。たとへ、夢ほどの疑ひをでも、靜代に對して抱く事は、彼女に對する許され難い冒瀆であらねばならぬ。彼女は、このやうにまで自分を愛してゐて呉れるではないか？ 何も彼も皆自分に捧げてゐて呉れるではないか？ どうして、彼女を疑ひ得よう！

とは思ひながらも、專一は、故知らぬ不安を——忍び風のやうに心の底に潜入して來る一種の不安を何うする事も出來無かつた。病氣のせゐなのだ。病的に鋭くされた神經のせゐなのだ。いや、おれは屹度酷い神經衰弱にかゝつてゐるのかも知れないと、專一は反省して見るのだが、そ

の理由のない不安が、理由が無いだけに一層意地悪く彼の心をさいなむのをどうする事も出來無かつた。

不安、而して嫉妬。

對象の知られない漠然とした嫉妬。――東京で靜代をつとめに出してゐた頃に、彼女の留守に、それで苦んだあの嫉妬が、かうして彼女を手許から離してゐると、どすぐろい炎を彼の胸にいぶしはじめるのであつた。

自分たちの爲めに月々金を出して呉れてゐるそのパトロンとは、一體どんな人なのか？　專一にはいつもそれが氣にかかつてゐた。靜代は、たゞ亡父の友達だとだけで、くはしい事を語つて呉れた事が無い。訊かうとすると、ひどく訊かれるのを厭ふ樣子で言葉を濁してしまふ。それ程の並々ならぬ好意を見せて呉れながら、手紙一つ呉れた事が無いのも何となく腑に落ち無かつた。月々の金は、屹度、靜代が東京まで受取りに行かねばならぬ。金を貰つて歸つた時の靜代の樣子は、何となく浮かないところがある。その山岸といふ人は、一體どんな人なのであらうか？　どんな風にして、靜代はその金を貰つて來るのであらうか？　――かうして、じつと考へて見ると、腑に落ちない事は二三にとゞまらない。專一は、眼のまはりに隈の出來た眼を大きくみひらいてじつと空間を見つめるやうにした。

靜代が出てゆくときから、專一はもうその歸りを待つた。小田原の停車場まで、二十分かゝる。もうそこへついた頃だ。午後零時十分の發車だから、もう汽車が出た筈だ。――といふ工合に、一々、時間を數へながら。汽車が東京まで二時間、それから小石川への往復が用談を交へて二時間、それから歸りが二時間、おそくも七時には歸る筈だが、その堪らなく待遠い六七時間を、彼は、身體はさうして床の上に横たはつてゐながらも、心は、彼女に添うて、汽車に乘つたり、電車へ乘つたりする氣持だつた。

東京驛で降りて小石川へ行く電車に乘るまでの靜代には、專一もはつきりと跟いて行けた。が、それからの靜代は、どうも、專一の、心の追跡から見失はれがちだつた。小石川の福山町といふのは一體どの邊だらう？　山岸といふそのパトロンの家は無論堂々たる邸宅に違ひないが、山岸といふ人は一體どんな人であらう？

專一は、その應接間の卓によりかゝつてゐる山岸氏の姿と、その前に小さくなつて掛けてゐる

靜代の姿とをそこに想像した。山岸氏の姿は、あゝか、かうかと、いろ〳〵に想ひ描いて見ても、どうもはつきりとしたかたちをとつて來なかつた。而して、それがひどく專一の不安をそゝるのであつた。

靜代がうそをついてゐるとは思はれない。しかも、そこには何かの秘密が横たはつてゐる樣な氣がしてならない。靜代が歸つて來たら、腑に落ちるまで十分訊いて見なければ——。

專一はさう思ひながら、只管に靜代の歸りを待つた。

遲い歩みで時が過ぎた。六時になり、七時になり、やがて八時になつた。遲くも九時には歸る筈だつた。もう、多分、歸りの汽車に乘つてゐるに違ひ無い。もう一時間——と思ふ頃から、風雨が强くなつて來た。松の林が呻きをあげ、海岸の孤つ屋は船室のやうに搖れはじめた。横しぶきの雨が、しめきつた雨戸を激しく打つた。

生憎の天氣だ。しかし、停車場からは俥で歸るのだから——と專一は思つた。そのうちやがて九時だつた。彼は、今か今かと靜代の歸りを待つた。

だが、九時が打つても靜代は歸らなかつた。

十分過ぎ、二十分過ぎ、三十分過ぎた。刻一刻命を刻む思ひで專一は待ちに待つた。が、どうしたといふのであらう。十時になつても靜代は歸らなかつた。

不安は次第に嵩じて來た。が、先方の都合か何かで、少し餘計に手間取つたのかも知れない。置いたものを取つて來るわけではないのだから——。さう、專一は考へて、不安の鎌首を靜かにおさへてゐた。

益〻つのり行くあらしの中に夜は次第に更けて行つた。海の音が耳近く轟き寄つて來る。遠くの方で、犬の吠える聲がする。——やがて、十一時に近くなつた。

專一は、十一時が鳴るのを聞くと、もう、不安を抑へることが出來なくなつた。彼は床の上に起きあがつた。

何か事件があつたのだ！　さう彼は直覺した。かうしては居られないといふ氣がした。

床の上に起きあがつた彼は、戸外のあらしに耳を傾けながら、良久くの間じつとしてゐたが、遂に決然として床を蹴つて立つた。

汽車の中

今夜は、身體工合もいつもより惡かつた。熱は測つて見ないが、かなりあるらしかつた。立つとふら〳〵とよろめいた。息も苦しかつた。が、そんな事を顧慮してゐる餘裕はもう失はれてゐた。せめて、停車場までででも出迎へて見よう！　彼は急いで身仕度をした。ぞく〳〵と惡寒のする身體に、彼は冬の洋服と、冬の外套とを着た。その上に、雨外套を重ねた。而して、膝まである長靴を穿くと、かうもり傘を手にして、あらしを衝いて、戸外へ出た。

眞暗だつた。眞暗な中に、あらしが吼えてゐた。ともすればかうもり傘が風にさらはれさうになり、砂交りの横しぶきが、痛いまで頰を叩きつけた。彼は、よろめく足をふみしめるやうにして歩いた。――小田原の停車場へついた時は、全身ずぶ濡れになつてゐた。

そこの待合室には、こんな天候にもかゝはらず、かなり賑かに、影が動いてゐた。人々は、ずぶぬれになつて、ひどく寒ざめた顏に眼ばかりきら〳〵と輝かしてゐる專一の樣子を見ると、皆、その眼を睜るやうにした。が、さうして一齊に自分に集められた人々の視線を氣にしたりす

る餘裕は無かつた。彼は時間表の前に行くと、燃えつくやうな眼で、下り列車が、この次に、此の驛に着く時間を檢べて見た。

十一時二十分着といふのがあつた。時計を見ると、あと十分ばかりだつた。

これだ！　屹度此の汽車で着くに違ひ無い。專一は、さう思つて、改札口のところに突立つて、身動ぎもせず、呼吸をつめるやうにして待つた。

やがて汽車が着き、歩廊の方に騷然として足音が亂れはじめた。三々伍々、降車客が、改札口に向つて急ぎ足の姿をあらはした。專一は、その一人々々を眼で掬つて、掬つては投げ捨て掬つては投げ捨てした。どうしたといふのだ！　靜代は、たうとうその中にもゐなかつた。

專一はがつかりした。彼は、よろ〳〵と、腰掛に倒れかゝるやうにした。

その次は十二時一寸前に着くのがあつた。それが最終で、それで歸らなければ今夜はもう歸らない事になる。歸らないといふ事は無い筈だ。たとひどんな事があらうとも、泊つて來るなどといふ事は斷じてない筈だ。今度こそ！　彼は、もう一汽車待つ爲に沮喪した心に最後の努力を喚び起した。

——だが、その最後の降車客の中にも、靜代の姿を見出す事は出來なかつた。彼は、へた〳〵とそのまゝそこへ崩折れようとするのを、からうじて支へた。

何事かが起つたのだ！　東京へ行つて見よう！

さう決心した彼は、もう一度つか〳〵と時間表の前に歩み寄つた。上りが出るにはもう間もない事がわかつた。

彼は、東京驛までの二等の切符を買つた。そして、東京行きの汽車に乘込んだ。車室は、隙いてもゐず、混んでもゐなかつた。彼は、その隅の方に空席を見出して、座褥に身體を投げつけるやうにした。ほッと吐いた息は火のやうだつた。身體全體が燃え立つ中を、一脈の惡寒が、蛇のやうに背筋を這つた。彼は、がた〳〵とふるへた。

東京へ行く。行つて、さて、どうすればいゝのか？

さう考へると彼は當惑した。彼は、輕率に汽車に乘つた事を後悔した。が、では、じつと家で明日の日まで待つて居られるだらうか？

兎に角東京へ行かう！　東京へ行きさへすれば——。

彼はさう心に繰返した。汽車はあらしを衝いてまつしぐらに走つた。併し、ひどく急き立つ專一の氣持には、その汽車の動きさへたまらなくもどかしいものに思はれた。

『はゝゝ、ひどく悄げて居るね。どうしたのだい？』

『別にしよげてもゐないけど——』

『旦那樣が怖くなつたのかい？』

『いゝえ。さうぢやあ無いけど——』

ふと、こんな會話が——ひそやかな會話が、專一の現とも無い耳に觸れた。專一は眼をあげた。而して、彼の前に、二十ばかりの若い細君風な女と、四十より下ではないと思はれる紳士とが、肩と肩とを寄せ、頰と頰とを觸れ合はせるやうにしてゐるのを眺めた。男は、服裝も風采も堂々としてゐて、大きな會社の重役か何かといつた樣子だつた。女は、小柄で色白で、小鳥のやうに可憐の感じがした。紳士の餘裕のある微笑を、その肥つた頰のあたりに漂はしてゐるに引換へ、女は、何となくあたりを憚る風に、ひどくおど〳〵としてゐた。どう見ても、二人は夫婦ではなかつた。しかし、何かわけのある間柄とは、一目見たばかりで知れた。

『矢張氣になるのだね？　――まあ宜いさ。知れたら知れた時の事さ』

『……』

『しかし、それだけの度胸はあんたには無いのだね。やさしいあんただから、それも無理はないが、あんな病人の傍にいつまで跟いてゐても仕やうが無いぢやあ無いか？』

『でも、矢張、あの人が氣の毒ですもの』

『人の氣の毒よりも、自分の事を先づ考へて見なけりやあね。尤も、假にも夫婦となればそれも無理は無い話だが――』

『何だか、矢張氣が咎めて――』

『はゝゝ。あなたは仲々貞女だな。旦那さんは仕合せだよ』

あたりの人は皆、うと〳〵と半ば眠つてゐるといふ風である。一番身近くにゐる專一も、眼を閉ぢてぐつたりと窓框に後頭部を投げかけてゐたので、眠つてゐるのだと思つたのだらう。紳士の言葉はいかにも傍若無人であつた。

傍若無人な紳士の言葉を耳にしながら、專一は、はげしくかきみだされた。夫のある女と、

その女を弄んでゐる男と――この不倫の男女を眼の前に見る事に、彼は堪へがたい苦痛を感じた。

專一は、今日讀んだ――讀みさして止めた小說の事を思ひ出した。あの小說と云ひ、今此の眼の前の二人が見せてゐる事實と云ひ、世の中にはいかに暗い秘密が充ち充ちてゐる事ぞ！

――靜代！　靜代！　お前は――？

專一は、眞暗な疑惑に胸をとざされた。病熱に朦朧として來たあたまには、その、今眼の前にゐる若い女の顏が、靜代の顏に見えたりした。彼は、もうたまらなかつた。彼は、いきなり立ちあがつて、つか〳〵とその女の前に歩み寄つた。

二人は、びつくりして專一の顏を見て居る。

專一は、底深く燃える眼で、二人の顏を交る〴〵睨みつけるやうにした。今にもつかみかゝらうとするやうな權幕を見ると女は、

『あら』

と聲を立てゝ、男にすがり寄るやうにした。

『何だ？　何か用があるのか？』

男は、專一を睨み返しながら云つた。專一はやうやく我にかへつた。

『はゝゝ！』

專一は、嗄がれた聲で笑ふと、またもとの座席にかへつて、身體を座褥に投げつけた。

混沌

汽車は東京驛に着いた。專一は蹌踉としてプラットフォームに降りた。此の時刻の降車客は流石に然う澤山は無かつた。專一は、その人々の群に交つて改札口を出た。

風はいくらか、凪いでゐたが、雨は相變らず降り續けてゐた。深夜の灯影は濡れた地面をところどころ幻怪的な青白さでぼかしてゐた。その中を、自動車の影や人の影が、黑い影像になつて動いてゐた。

專一は、停車場の出口に立つてしばらくの間ぼんやりとその光景を眺めて居た。こゝまで來はしたが、さて、どうしたらよからう？

小石川の福山町、番地はたしか二百何番とか、聞いてゐたが、しかし、もう人を訪ねる時刻ではない。――いや！　そんな事を顧慮してゐられる時ぢや無いと、專一が躊躇する心を鞭打つて、一歩雨の中を歩き出した時、そこに客待ち顏の自動車が眼に入つた。

『お乘りになりますか？』

『うん』

專一の懷中は、自動車賃も覺束無かつた。が、電車は未だあるにしろ、彼はもうすつかり疲れてゐた。――彼は、すゝめられるまゝに自動車に乘つた。

『どちらへいらッしやいます？』

と、助手が聞いた。

『小石川』

『小石川のどの邊でございます』

『福山町』

自動車は、雨を衝いて走り出した。專一はぐたりと身を座褥に投げかけて眼を瞑つた。疲れ切

つた專一は、もう緊張の持續に堪へられなくなつてゐた。――彼は自動車が、何處を何う走つてゐるかを知らなかつた。夢ともうつゝともわからぬ氣持だつた。

『福山町は、何番地でございませう？』

さう問はれると、專一は、急にしやつきりとした心持になつて、

『來たのか？』

『へえ、もうすぐ福山町なんですが、番地は何番地でせう？』

專一は、はたと當惑した。二百――といふだけは、覺えてゐるが、二百――何番地であつたか、一寸靜代に訊いただけなので、そこがどうもはつきりしないのであつた。

『――二百何番かだがな？』

『二百何番？　何番かおわかりにならないのですか？』

『さうだ。二百だけは覺えてゐるが、あとは忘れてしまつた。交番があるだらう？　交番で聞いて呉れ給へ』

專一は一種得態の知れぬ腹立を感じながら云つた。

助手は一寸舌打をして運轉手に何をかさゝやいた。

自動車は少し引返して、血紅色の軒燈の前に停められた。

『お名前は、何と仰有るんですか？』

助手が、車から降りながら訊いた。

『山岸といふんだ』

『山岸、何と仰有るのです？』

『山岸幸藏』

助手は降りて行つて、その交番の巡査に聞いてゐる樣子だつたが、やゝしばらくしてから戻つて來て、

『どうもわからないんですがねえ。二百から三百までの番地をみんな調べて貰つたんですが、山岸ツて人はゐないんですがねえ』

と、當惑したやうに云つた。

『居無い？』

『えゝ。帳面を調べて貰つたから慥かです。番地が違つてやしませんか』

さう云はれゝば二百――では無かつたか知ら？　もと〳〵曖昧な記憶なので、專一ははたとつかへてしまつた。

『番地がはつきりしないぢやあ、どうも困るですね』

助手は、當惑してゐる專一を見ると忌々しげに云つた。――その助手の樣子が、ぐツと癪にさはつたので專一は、よしおれが自分で訊く！　かう苛立たしく心の中に叫びながら、よろよろと自動車の外へよろめき出た。

專一は雨に濡れながら、その交番の前に立つた。巡査は眼を睜つた。その眞青に青ざめた、唯、眼ばかりがきら〳〵と燃える、見るからに病人らしい專一の樣子は、ひどく巡査を驚かしたらしかつた。

『二百――ぢやあ無かつたかも知れません。百二十何番地だつたかも知れません。もう一度調べ直して頂け無いでせうか？』

『山岸――幸藏といふんでしたな』

巡査は、面倒臭さうにではあつたが、でも、もう一度帳簿を繰返して、

『どうも無いやうですな。山口といふのや、山村といふのはあるが、山岸といふのはありませんな』

『さうですか？　無いですか？』

專一はがつかりしたやうに云つた。

『あんたは大變身體がお悪いやうですな』

『いゝや、何でも無いんです』

と、强ひて元氣好く云つたが、專一は、一つは絶望の爲めもあり、思はずよろ〳〵とよろめき倒れようとした。

巡査は、氣の毒さうな眼でその樣子を打戍つたが、更にもう一度ぱら〳〵と帳簿をめくるやうにして、

『えゝと――山岸と――山岸政之助といふのならありますがね、但し、それは三百七番になつてゐる。その山岸といふのは職業は何ですかな？』